澪電

1993. 4　No. 14

目　　次

会長ご挨拶（成松啓二）…… 1
澪電会昔ばなしなど …… 2
澪電会役員 …… 4
澪電会だより …… 6
話　　題 ……13
退官された先生方の近況 ……17
卒業生の近況 ……19
留学生の声 ……23
講座紹介 ……24
母校のニュース ……26
教室情報 ……31
会員の方々のご活躍 ……33
同窓会だより ……35
卒業者氏名（就職先）……38
入学者氏名（出身校）……40

大阪大学工学部電気系　澪電会

平成５年度澪電会総会・懇親会ご案内

平成５年４月
澪電会会長　成松啓二

拝啓　陽春の候、会員の皆様にはご健勝で益々ご活躍の事とお慶び申し上げます。

さて、平成５年度澪電会総会ならびに懇親会を下記のとおり開催致します。昨年は200名を越える卒業生や先生方が出席され大盛況でした。大学の先生方を交えて先輩、後輩、同期生の方々が一堂に会して旧交を温めつつ情報交換を行う絶好の機会でございます。また、総会・懇親会に合わせて日頃ご無沙汰の同期会を企画するのもよろしいかと存じます。現在、各方面でご活躍中の皆様方の原点は母校・阪大電気系であることを思い起こして頂き、お誘い合わせの上多数ご参加下さいますようご案内申し上げます。　敬具

―― 記 ――

日　時：　平成５年６月４日（金）　午後６時～９時
場　所：　大阪梅田・新阪急ホテル（大阪市北区芝田１－１－35　☎:06-372-5101）
次　第：　１．総　　会　　午後６時～６時30分　「花の間」
　　２．スピーチ　　午後６時30分～７時　「花の間」
　　『システム理論の楽しみ』
　　大阪大学電子工学科　　教授　児玉慎三先生
　　３．懇親会　　午後７時～９時　「紫の間」
会　費：　学部卒業昭和59年以降の方　　5,000円
　　〃　　以前の方　10,000円

会費は当日申し受けます。懇親会のみのご参加も歓迎致します。

準備の都合上、出欠のご返事を同封のハガキにて来る５月22日(土）までにお知らせください。

会長ごあいさつ

澪電会会長　**成松啓二**
（電気・昭和25）

会員の皆様には日頃澪電会に一方ならぬご協力をいただき、誠にありがとうございます。

また役員の皆様、中でも母校の先生方や事務局の方には日頃当会の運営につきまして格別のご尽力をいただいており、有難く厚くお礼申し上げます。

私どもの澪電会は、設立以来70年余りの歴史を経て、現在6,000名弱の会員数を有する大きな組織に成長しました。本部以外にも東京、名古屋、北陸につづいて、昨年関係各位の努力により九州、四国支部が設立され中国支部も設立準備をしております。各地域毎に定期的に支部総会が開かれるなど、活発に活動が展開されております。

今後これらの支部を通じて会員相互の親睦の輪がさらに拡がっていくものと期待しております。

また、今年3月には電気系の4番目の学科として設立された情報システム工学科から、初めての学部卒業生が社会に巣立ってゆきました。電気、通信、電子、情報システム工学の発達とともに、澪電会はますますその技術的すそ野を拡げつつあり、幅広い電気通信技術の交流の場として、大学や実社会で活躍される卒業生にご活用いただくことをお願い致します。

さて、皆様ご存じのように、わが国経済はバブルの後遺症から不況の輪が一段と広がるなかで、産業界においても、生き残りをかけ、厳しい事業の再構築がすすめられておりますが、地球環境への対応、世界との調和、社会との共生といった新たな課題を負っておりますだけに、これまでにない難しい時代を迎えているようにおもいます。

こうした中で、関西に目を向けてみますと、昨年末大阪ベイエリア法案が可決されたのをはじめ来年夏の開港を控えた「関西国際空港」あるいは「関西文化学術研究都市」「播磨科学公園都市」の建設など多くの大型プロジェクトが進行中であり、またここでの広帯域総合デジタル通信網（B－ISDN）の実験、あるいは電力貯蔵技術の開発等の研究プロジェクトも軌道に乗りつつあります。

このような環境のもと、電気、通信、電子、情報技術に携わっておられる皆様方の役割はきわめて重要なものであるとおもいます。

爾来大阪大学の校風は、商都大阪で生まれた町人文化と適塾などを淵源とする学問的伝統の影響を受け自由な気風を好み、独立心が強く、閥を好まないことを特色としており、大学の影響を受けないという自由闊達さや独立独歩の精神が旺盛であると言われておりますが、それ故自ずと卒業生のつながりも希薄なところがございます。

一方、今後は産官学の相互の連携や情報の交流などが、ますます重要になってくるものと思われますので、仕事上のみならず、仕事を離れての業際的交流の場としても、もう少し同窓会に関心を持って頂き、卒業生のネットワークの輪を強めてもよいのではないかとおもいます。

このような観点からも、澪電会の存在価値は、ますます大きいものになっていくものと考えます。

従いまして、この澪電会をさらに育て、発展させていくためにも、来る6月の本部総会はもちろん、各支部の総会にも積極的にご出席いただき忌憚のないご意見、ご提案をいただきたいとおもいます。

最後になりましたが会員のみなさまに澪電会のご利用と本会の活動に対するご指導とご支援をお願いするとともに、会員各位の一層のご健勝、ご活躍とご多幸をお祈り申し上げて私のご挨拶とさせていただきます。

澪電会昔ばなしなど

大阪大学名誉教授　**山口次郎**
（電気・大正15、昭7）

第1話　澪電会の創設

澪電会の創設の頃の様子は、私の年齢の点から言っても知るよしもない。ただ昭和36年頃、私が澪電会の会長になった時、会長の立場から澪電会の古い歴史を知っておこうと思い、先輩を訪問して、いろいろと聞いた。この記憶を辿りながら、述べてみよう。

明治41年（1908年）4月、阪大工学部の前身の官立・大阪高等工業学校（以下大阪高工）が創立され、電気科などの6学科が設置され、電気科には30名が第1期生として入学した。そしてこれらの生徒が3年先きに卒業して社会で活動する時のことを配慮して、卒業生の会を作ることを計画し、会名を澪電（レイデン）とされた。澪（ミオ）は大阪を示す澪標（ミオツクシ）からとり、澪電会は大阪の電気の会をあらわした。一方レイデンは、入学早々の静電気学の講義にでてくるライデン瓶のライデンに通ずるので、澪電という言葉は生徒の関心を引いた。なおレイデンの澪は以前は二水篇であったが、10年位前から三水篇に変った。

第2話　大阪高工時代

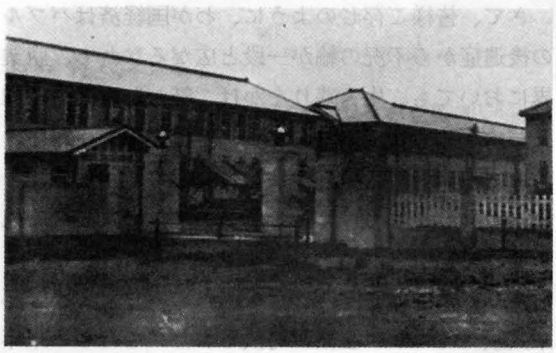
私が少年であった1910年頃、大阪高工は現在の阪大病院の前を流れる堂島川の左岸で病院より少し下手にあった。この学校の正面の門は黒かったので、東大の赤門にならって黒門の大阪高工と呼ばれた。

この学校は毎年1回、校内を一般の人に解放し、校内の設備や教育用の機具の参観に供した。なお展示品の説明は生徒が担当し、また応用化学科では石鹸類、醸造（じょうぞう）科では醤油（しょうゆ）

堂島川畔の大阪高等工業学校（黒門時代）

などを売っていた。私の家は学校までは徒歩で15分位の江戸堀にあったので、12〜13才頃に1度見学に行った。見学者が多かった印象がある。

大正12年4月、私が大阪高工に入学した時には校舎は既に中之島から、都島区東野田に移転していた。この頃には6学科間で野球、ラグビー、角力、柔道等の対科仕合が盛んに行われ、各科にそれぞれ応援団があった。電気科の旗は紫色の基地にD字（Denkiの意味）が白く染めぬかれたもので、応援歌は



東野田に移転して間のない大阪高等工業学校の校舎

『ああ紫の大旗にD字をかざす若者（ワコウド）が、一度立たば百万の敵騎甲兵打ち破り、必勝期する陶内に青春の血の燃ゆるかな』

『桜の宮の秋深く、捺乱（ヨウ）の花、色褪（ア）せて、世はろ乱の酒に酔い、宴の席にふけれども、見よ城北に一百の澪電健児、腕がなる』

なおこの歌詞には間違いがあろうと思う。そのときはご容赦を。

卒業生を送る会場は、牛肉のすき焼き屋の大広間を用いた。会の始めに一年生が先ず芝居（シバイ）をする。約10名の生徒が役者になって男、女、老、幼に扮する。

私は老婆を指名された。この芝居の風景は今では想像もできない珍風影である。

大正15年3月、私等28名が卒業した時は、芝居付きの送別会はなかった。しかし澪電会の幹部の先輩から堂島の中央電気クラブで、祝賀会を催してもらい、フルコースの洋食の御馳走を頂いた。この宴席で私々の席に一人づつ finger bowl が置かれていた。生徒のなかにボールの水を飲んだものがいたらしく、先輩からこの水は飲むものでなく、指先を洗うものだという注意があった。それ程私等は洋食の作法に疎かった。

第3話　大阪高等工業学校－（官立）大阪工業大学－大阪帝国大学工学部

昭和4年4月、大阪高工は（官立）大阪工業大学に昇格し、第1期生として15名の学生が電気工学科に入学した。年長の角帽の大学生（1年生）と年下の丸帽の高工生（2、3年生）が同じ屋根の下で勉強した。この時高工の生徒は従来から澪電学生会を組織し、集めた会費で外国図書を購入したり、スポーツ用のものを整えていた。我々角帽の学生もこの会に入会し、直ぐに学生と生徒が一つにまとまった。私は学生、生徒中の最年長であり、大阪高工の先輩ということで澪電学生会の会長になった。会員諸君も私の言うことを理解してくれた。ちなみに澪電学生会は最後の高工生が卒業した昭和6年春に解散した。

昭和7年3月、私等は大学を卒業した。その時授与された卒業証書は大阪工業大学名であったが、次の学生からは大阪帝国大学名の卒業証書がわたされた。私等を幻の阪大工学部の第1期の卒業生というのはこの事情による。

第4話　太平洋戦争時代以降

太平洋戦争で壊滅した大阪帝国大学工学部学舎

昭和17年頃から約15年間は太平洋戦争の進行と、戦後の社会の混乱のため、澪電会の活動は不活発であった。しかし昭和30年頃からは七里義雄、熊谷三郎両先生のご配慮があり、また宮脇一男先生の名簿作成の試みがあった。そして昭和34年頃、私が会長になり、長く中絶していた澪電会の総会、役員会の復活および名簿の刊行などが行われた。ついで菅田栄治、南茂雄、東野俊一、正井透、尾崎弘、小林啓次郎の各氏が会長になられ現在の成松啓一氏につながれ、澪電会の今日の発展をみるに到った。なお澪電会の会報の発刊は菅田会長の時に始まったことを申し添えておこう。

吹田千里地区の大阪大学工学部電気系の学舎

澪電会役員

平成四年度澪電会本部および支部役員としてご尽力頂いた方々は下記のとおりです。(○印は本年度新たに就任された役員、敬称略)

また、澪電会支部として東京、名古屋、北陸支部が活動を行なっていますが、澪電会だよりにありますように新たに九州支部と四国支部が設立されました。中国支部も今秋の発足に向けて準備を進めております。役員氏名の他に、本部および各支部の連絡先を付記してありますのでご用の節はお気軽にご連絡下さい。

［本　部］

会　長

○成松　啓二（電気・昭25）関西電力㈱

副会長

倉岡　　澄（電気・昭22）東海コンクリート工業㈱

小島　卓哉（通信・昭22）芝浦工業大学

○岩澤　　宏（通信・昭26）福井大学名誉教授

○裏　　克己（通信・昭28旧）阪大・電子

幹　事

松井　昭夫（電気・昭30）㈱ダイヘン

松浦　虔士（電気・昭35）阪大・電気

○浅川　　繁（通信・昭37）㈱東芝

北橋　忠宏（通信・昭37）阪大・産研

山中　龍彦（電気・昭38）阪大・レーザー

○白川　　功（電子・昭38）阪大・情報システム

○吉野　勝美（電気・昭39）阪大・電子

○佐々木孝敏（電子・昭40）富士通㈱

○野依　正晴（電子・昭40）松下電産㈱

吉田　邦男（電子・昭40）シャープ㈱

○鷹岡　昭夫（電子・昭41）阪大・電子

佐々木孝友（電気・昭42）阪大・電気

土井　四郎（電気・昭42）三菱電機㈱

中川　興史（電気・昭42）関西電力㈱

打田　良平（電子・昭42）三菱電機㈱

岩城　周作（通信・昭43）オムロン㈱

○玉川　允敏（通信・昭43）㈱日立製作所

○奥野　晋也（通信・昭44）三洋電機㈱

中野　秀男（通信・昭45）阪大・通信

○山田　隆持（通信・昭46）日本電信電話㈱

○薦田　憲久（電気・昭47）阪大・情報システム

安栖　一美（電気・昭47）住友電気工業㈱

○四方洋一郎（通信・昭47）日本電気㈱

○笹谷　幸裕（電子・昭47）住友電気工業㈱

寺井　春夫（電気・昭48）松下電産㈱

原　　格（電気・昭48）関西電力㈱

○富田　義数（通信・昭48）三洋電機㈱

高部　英明（電気・昭50）阪大・レーザー

鬼頭　淳悟（通信・昭51）シャープ㈱

連絡先：〒565　吹田市山田丘2－1

大阪大学工学部電気系内

澪電会事務局　安井晴子

TEL 06-877-5111 内線4599 FAX 06-875-0506

［東京支部］

支部長

小島　卓哉（通信・昭22）芝浦工業大学

総会幹事団体　日本電気㈱

幹事団体代表

矢野　政顕（通信・昭40, M昭42）日本電気㈱
C＆Cシステム事業グループ主席技師長
TEL 0423-33-1320

連絡先：〒183　東京都府中市日新町1－10
日本電気㈱ 第一基本ソフトウェア開発本部
第一開発部　山元正人
（電気・昭53）
TEL 0423-33-1265　FAX 0423-33-1882

［名古屋支部］

支部長

倉岡　澄（電気・昭22）東海コンクリート工業㈱

幹　事

松本　圭二（電気・昭41）三菱電機㈱ＦＡシステム部

連絡先：〒455　名古屋市港区潮凪町10号地
東海コンクリート工業㈱相談役　倉岡　澄
TEL 052-381-2726　FAX 052-384-5254

［北陸支部］

支部長

岩澤　宏（通信・昭26）福井大学名誉教授

庶務幹事

浅田　勝彦（電子・昭38）福井大学

連絡先：〒910　福井市文京3－9－1
福井大学工学部情報工学科　浅田勝彦
TEL 0776-27-8577　FAX 0776-27-8751

［九州支部］

支部長

河村　寿三（電気・昭29）福岡工業大学

幹　事

金藤　敬一（電気・昭46）九州工業大学

連絡先：〒820　飯塚市大字川津680－4
九州工業大学情報工学部電子情報工学科集積回路講座教授　金藤敬一
TEL 0948-29-7664 ext 303 FAX 0948-29-7651

［四国支部］

支部長

山下　一彦（電気・昭31）四国電力㈱

幹　事

坂本　明雄（電子・昭46）徳島大学

連絡先：〒770　徳島市南常三島町2－1
徳島大学工業短期大学　坂本　明雄
TEL 0886-23-2311 ext 4612 FAX 0886-54-9632

［中国支部］

支部長

三上　彦三（電気・昭23）中電工業㈱

幹　事

坂本　昭彦（電気・昭42）近畿大学

連絡先：〒729－17　東広島市高屋うめの辺1番
近畿大学工学部電子情報工学科　坂本昭彦
TEL 0824-34-7000 ext 640
FAX 0824-34-7011

澪電会だより

平成４年度総会・懇親会

229名の参加を得て、平成４年６月５日（金）午後６時より梅田・新阪急ホテルで開催された。総会は春名正光幹事（電子・昭43）の司会で進行した。まず、小林啓次郎会長（電気・昭22）のご挨拶に続いて、白川功総務幹事（電子・昭38）から平成３年度事業報告があり、合わせて九州、四国、中国支部の発足準備状況が報告された。また、松浦虔士幹事（電気・昭35）から平成３年度決算報告、山中龍彦幹事（電気・昭38）から名簿発行会計報告があり、承認された。この後、２年間の任期を終えられた小林会長が成松啓二氏（電気・昭25）を新会長に推薦・満場一致で承認され、成松新会長より新任のご挨拶があった。新会長以外の平成４年度の新任役員は14名であり、拍手でもって承認された。引き続いて、松浦虔士・新総務幹事より平成４年度事業計画が、そして吉野勝美新会計幹事（電気・昭39）より同予算案の説明があり、共に承認された。

総会に続いて、山中龍彦幹事の司会で恒例のスピーチが行われた。今年度は超伝導エレクトロニクス研究センター教授・村上吉繁先生から『超伝導の夢と超伝導電力貯蔵』と題してスピーチを頂いた。時代の最先端技術として注目されている超伝導工学について、先生ご自身の研究成果を踏まえて丁寧に解説され、将来の超伝導応用の夢がますます膨らんでいく思いがした。

懇親会は定刻を過ぎて午後７時15分から開催された。白川功幹事の司会で会は進行し、成松啓二新会長のご挨拶に続いて、山口次郎・元澪電会会長（電気・大15／昭７）と熊谷信昭・阪大前総長（通信・昭28旧）からご祝辞を頂き、参加者一同両先生の熟成した人生感に基づく機知に富むお話に聞き入った。祝電披露の後、東野俊一・元澪電会会長（電気・昭15）の音頭で乾杯が行われ、立食パーティに入った。発足間近の九州、四国支部の支部長・河村寿三先生（電気・昭29）と山下一彦氏（電気・昭31）のスピーチをまじえて、１時間余りの歓談の後、故・手塚慶一副会長（通信・昭26）のご発声で万歳三唱を行い、盛況のうちに散会となった。

（白川　功（電子・昭38）記）

京大・阪大電気系スポーツ大会

第35回（平成４年度）京大・阪大電気系交歓スポーツ大会（通称京大戦）は、阪大が幹事校となり、平成４年７月13日（月）に関西電力株式会社水無瀬体育施設で行われました。時おり雨が降るあいにくの天候になりましたが、幸い全競技を実施することができ、両校合わせて130名以上が参加する活気あふれた大会となりました。

両校バスの到着後の開会式では、阪大側を代表して白川功教授が歓迎の挨拶を、京大側を代表して卯本重郎教授が挨拶をされました。各競技場では盛大の応援の下で熱戦が繰り広げられました。競技の成績は以下のとおり、接戦ながら阪大が3対2で2年連続の総合優勝を果たすことができました。

〔戦　績〕	阪大		京大
野球	×	3−14	○
ソフトボール	○	10− 7	×
テニス	○	7− 2	×
バレーボール	×	0− 2	○
卓球	○	11− 4	×
総合成績	3	−	2

スポーツ大会終了後、午後4時30分より施設内の食堂で懇親会が盛大に行われました。阪大の尾浦憲治郎教授の開会の辞、京大の吉田進教授のご挨拶、阪大の青木亮三教授の乾杯に始まり、和やかに歓談が行われました。途中、戦績報告が行われ、各種目の勝利監督に阪大の白川功教授より優勝杯が授与されました。両校競技監督および敢闘選手のスピーチ、祝杯等の後、次回幹事校の木村磐根教授のご挨拶、阪大の鈴木胖教授の閉会の辞をもって、午後6時に散会となりました。

なお、本大会を開催するに当たり、澪電会より10万円のご寄付を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

（石浦菜岐佐（情報システム・講師）記）

見学会　動燃敦賀実験所・高速増殖炉「もんじゅ」

平成4年10月23日（金）、恒例の澪電会見学会が催された。今回は、昨年来プルトニウム輸送船「あかつき丸」に関連してマスコミでさわがれた高速増殖炉「もんじゅ」の見学であった。当日は天気に恵まれ、南茂雄夫婦を始め西村正太郎先生らの参加もあり、合計47名の見学会となった。8時45分ホテル阪神駐車場に集合、出発には成松会長が駆けつけ挨拶された。

バスは名神・北陸自動車道を経由して敦賀へ。車中では、用意した資料に従って高速増殖炉の原理から将来のエネルギー資源まで含めて山中幹事が説明した。その後、美浜で昼食をとり、海の幸に舌鼓をうちながら、2時ごろ敦賀半島北端部白木地区にある実験所に着いた。

まず会議室にてかなり高度な科学的資料も含め、原理、計画、現状等について動燃の担当者より熱の入った説明を受けた。その後、三班に分かれ、原子炉・タービン建屋を見学した。プルトニウム燃料は、まだフランス・シェルブール港にあり、おかげで原子炉の上部より炉内を覗くことができた。燃料が入ってしまうと、見学者はもちろん立入りが許されない場所である。あと、タービン室、制御室などを見学、すべてにスケールが大きく、見学者も満足の様子であった。

動燃から200名ほどがこの白木地区に来ているそうで、単身赴任者が多いとか。動燃のビッグプロジェクトであり、説明してくださった皆さんの熱意が感じられた。93年はまずナトリウム配管の高温試験（400℃以上）、そして、10月には臨界実験の予定とのことである。動燃の方々の努力が実ることを願っている。

「もんじゅ」のあと、関電美浜原子力ＰＲセンターを見学した。美浜発電所へ至る橋の前に建った白亜のモダンな建物で、ここでは澪電会会員の西村康弘（電気36年卒）氏が私達を暖かく迎えてくれた。広角ビデオによる説明をうけ、同館内の見学を行った。

帰りはビールもはいり、疲れたのか休む人、話に花を咲かせる人と、和気合々のうちに7時過ぎ梅田に無事戻った。

参加者は昨年度より少し増え、中には「是非参加したいがウィークデーなので参加できない、とても残念だ」と、事務局に電話がかかってきたりと、企

「もんじゅ」建屋前にて記念撮影。

画した我々もうれしいやら申し訳ないやら。これからも会員の皆さんの交流の場の一つとして、見学会に多数の方が参加下さいますようお願いして筆を置きます。

（高部英明（電気・昭50）記）

卒業祝賀・謝恩会

卒業式の行われた平成5年3月25日（木）午後6時より、卒業祝賀・謝恩会が千里阪急ホテル仙寿の間で開かれた。参加者は学部及び大学院の新卒業生279名に、ご来賓、電気系教職員、澪電会役員の方々を加えて総勢約400名であり、吉野の司会で会は進められた。特に今年度、情報システム工学科から初めての卒業生39名を迎える事になり、しかも多数の教官のご参加を頂いたのでこの様な盛大な会となった。

まず、成松啓二会長、来賓の（株）日立製作所北川雄剛取締役、及び電気四学科主任教授代表として長谷川晃教授からそれぞれご祝辞を頂いた。引き続いて元澪電会会長山口次郎先生の乾杯の音頭で祝宴が始まり、しばらく歓談が続く中、熊谷信昭前大阪大学総長の祝電の披露などがあった。会半ばの頃、四学科の楠本賞受賞者に記念品が授与され、続いて企業の役員の方々のご援助により恒例の福引きが行われ、抽選発表の度に卒業生の大きな歓声がわくなどなごやかに会は進行した。

最後に卒業生を代表して通信工学科修士修了の佐伯勇君が謝辞を述べ、澪電会副会長名古屋支部長の倉岡澄氏の万歳三唱で閉会し散会となった。

このように盛大な卒業祝賀・謝恩会を催す事ができたのは、役員の方々をはじめとする澪電会会員の皆様方の温かいご援助によるものであり、ご多用中にも関わらず、快くご臨席賜ったご来賓の方々、電気系教職員の方々、会の準備から当日の受付業務に至るまで終始一貫してお世話頂いた事務局安井晴様、世話役としてご協力頂いた学生諸君、電気系秘書の方々に厚く御礼申し上げたい。また、記念品や福引の景品をご寄付頂いたオムロン（株）、関西電力（株）、サントリー（株）、三洋電機（株）、シャープ（株）、住友電気工業（株）、ダイキン工業（株）、（株）ダイヘン、（株）東芝、日本電気（株）、日本電信電話（株）、（株）日立製作所、松下電器産業（株）、三菱電機（株）の各社に心よりお礼申し上げる次第である。

（吉野勝美（電気・昭39）記）

平成4年度北陸支部総会報告

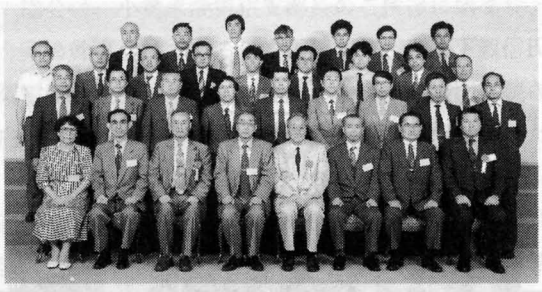
平成4年度第三回澪電会北陸支部総会が、6月6日（土）福井厚生年金会館で開催されました。今回66名の支部会員のうち27名が出席しました。

御来賓として大阪大学前総長の熊谷信昭先生、澪電会顧問の尾崎　弘先生、澪電会幹事の白川　功先生、事務局の安井晴子さんに参加頂きました。総会は型通り行われ、まず満歩支部長の挨拶があり、支部役員の改選について審議され以下の新役員が選ばれた。

岩澤　宏（支部長）、　浅田　勝彦（庶務）、
水谷　博（会計）、　石徹白和夫（名簿）、
地崎　陽一、　松田　秀雄、　森野　元庸

続いて、黒堀庶務、宮田会計幹事より平成3年度の事業計画、平成3年度会計報告、平成4年度予算案が説明され承認された。さらに澪電会会長代理として、澪電会本部報告を含め白川先生から挨拶があり、総会を閉会した。

引き続いて、熊谷先生から「日本の貢献と大学の役割について」と言うテーマで御講演を頂きました。その中で、まず、世紀末の大学と日本の政治と言う視点から日本の対外援助やODAの在り方について指摘され、まず日本の大学にくる留学生・外国人研究者が気持ちよく学べる講義棟、研究室及び施設、宿舎などを整備するのが順序と言うもので、分不相応な対外援助はかえって逆効果を招きかねないと論じられた。次に、象牙の塔と産学協同との立場から、産学協同望ましい方向を示された。さらに日本の企業の外国大学への講座・研究部門の寄付にも言及し、結局将来、日本の「基礎研究ただ乗り論」を助長する結果となる事を憂慮された。敗戦後、どん底の日本の大学に対して、豊かな米国は自国に研究者・留学生を招いて研究させるよう援助し感謝され、かつ自国の学術レベルも向上させた例を挙げて、同じするなら、日本の企業は日本の大学の基礎研究の推進に外国人を招いて日本で十分研究させるような援助を大学になすべきと論じられた。大阪大学総長、国



大協副委員長でご活躍された貴重な御体験をもとにした、打ち解けながらも熱気溢れる御講演に、会員一同時間の経つのを忘れ非常な感銘を受けた。

その後、懇親会に移り、ご出席の先生方の挨拶を頂いた後、出席会員の自己紹介、近況報告が行われ、和やかなうちに会が終了した。

平成4年度九州支部設立総会報告

平成4年11月16日（土）14時から、澪電会九州支部設立総会が挙行された。これには一寸した裏話がある。澪電会では兼ねてより会の活性化について心を砕かれ、特に熊谷前総長も率先して新しい地方支部の設立に向けて活動されている。今より1年位前から設立の具体化が進められたが、ご他聞に漏れず設立前には予算がない。村上先生から支部長には齢格好の点で河村（気昭29）がなるように根回しがあった折、格好はさておき設立祝い金の前借りができないか、と厚かましいご相談をお願いしたことであった。

会本部ではこれをシリアスに受け止められ、6月の本部総会に上程して頂き拍手でもってお認め頂けたときは本当に頭が下がった。早速幹事の金藤先生（気昭46）を中心に、岡村氏（気昭29）、狩野氏（気昭34）、中西氏（気昭42）、後に浜辺先生（ハ号）も加わって数回の打合わせの結果、本部に倣って情報発信幹事を多数お願いし、また多少費用も節約できる所から福岡工業大学での挙行が決定された。

総会当日は成松会長、山口初代会長、それに熊谷前総長、本部からは松浦先生、白川先生並びに安井さん、北陸支部からは岩沢支部長のご臨席を仰ぐ栄

に浴し40名弱の会になった。下名の予想を上回る規模であり、改めて紙上を借りて御礼申し上げる。

初代会長からは澪電会の成立の発端、前総長からは澪の字の意味、科学技術研究開発における我が会員の役割等、現会長からは支部設立の意義とお励ましを頂き、感慨深いものがあった。総会議事をお認め願った後、答礼の形で大分県工技院橋本所長（信昭36）の「地球大気のリモートセンシング――水蒸気計測を中心として」と題する設立記念講演があった。水蒸気も地球温暖化の一因とも言われており、水蒸気の赤外線吸収の高度依存スペクトル研究成果とそれを元に水蒸気密度の推定を行うという内容で、時宜を得た、誠に意義深いものであった。

その後1階食堂で懇親会に移り、お元気な山口先生を囲んでの乾杯と懇談、万歳三唱の賑やかな一時を過ごした。後日談としては熊谷前総長と福岡工業大学長（ハ号）とが研究活動を通じていわば竹馬の友であられたということで一段と親交を深められたとのことである。

どうかこれを機に、九州支部にも会員諸氏の熱烈ご支援をお願いしてポストバブルを乗り切りたい所存であります。

（河村寿三（電気・昭29）記）

平成4年度四国支部設立総会報告

前号（No.13 1992.4）で四国支部発足に向けて活動を開始したことが紹介されましたが、澪電会本部をはじめ関係者のご尽力により、去る平成4年11月28日（土）午後3時より高松市内のホテルに於いて四国支部設立総会を挙行することができました。ここに謹んでご報告申し上げますとともに、皆様方の一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

当支部は、山下一彦氏（昭31電）を支部長として、四国内在住の澪電会員97名（平成5年1月末現在）で構成しており、九州支部に続く全国5番目の支部として発足したことになります。

さて、設立総会は本部から成松啓二会長、山口次郎先生、松浦虔士先生、白川功先生、吉野勝美先生および事務局安井晴子様の6名の方々を来賓としてお迎えし、坂本幹事の司会のもと支部会員31名の出席を得て開催されました。支部長の挨拶並びに来賓への謝辞の後、成松会長、山口先生、松浦先生からご祝辞を賜りましたが、特に成松会長から澪電会の現状について、山口先生から澪電会の歴史についてご紹介があり、一同興味深く拝聴致しました。また、本部を代表して総務幹事の松浦先生より支部設立のお祝金が授与されました。

引き続き総会議事に入り、支部規約、支部幹事[坂本（昭46子）、今井（昭27電）、下代（昭48通）、森田（昭48電）]、活動計画等の案件について全会一致で承認し、約1時間で設立総会を終えました。なお、平成5年度支部総会は11月頃に松山市で開催の予定です。

総会終了後、下代幹事の司会のもと、支部設立に格別のお力添えをいただいた白川先生のスピーチ並びに四国支部重本俊明様（昭22電）のご発声による乾杯で懇親会に移りました。来賓の先生方を囲み学生時代のなつかしい思い出、あるいは近況等についての話に花が咲き、時間の経つのも忘れて盃を交わす姿があちらこちらで見られました。

最後は吉野先生の軽妙なスピーチ並びに万歳三唱で締めくくり、名残り尽きぬまま再会を約して午後6時散会致しました。

なお、末尾で誠に恐縮でございますが、四国支部設立に際し、祝電をお寄せいただきました各支部長様に、本欄をお借り致しまして厚くお礼申し上げます。

（森田　寛（電気・昭48）記）

平成5年澪電会東京支部総会報告

平成5年の澪電会東京支部総会が桜の咲き始めた3月26日（金）に郵便貯金会館・メルパルク東京にて開催されました。

出席者は、本部から出席をいただいた尾崎弘名誉教授を始め、多くの先生方と、事務局から安井晴子女史、関東一円の会員150余名の参加を得て、なかなかの盛会となりました。

総会は、小島卓哉東京支部長のご挨拶に始まり、今回の幹事会社である日本電気（株）の森下政信氏、澪電会会長代理として松浦虔士教授のご挨拶に続き、白川功教授による乾杯の発声で歓談が始まりました。

先生方、先輩・同輩を囲んでの楽しい歓談の中、吉野勝美教授の大学の近況と、大阪大学工業会東京支部の榊原純哉副会長、尾崎名誉教授、山中龍彦教授からのご祝辞をいただきました。

昭和5年卒業の方から平成4年卒業の方まで次の通りの方々が出席されました。

昭和1桁卒――― 2名
昭和10年卒――― 5名
昭和20年卒―――19名
昭和30年卒―――40名
昭和40年卒―――45名
昭和50年卒―――24名
昭和60年卒――― 6名
平成年代卒――― 7名

これらの幅広い年次に亘る多数の恩師・同窓生が旧交を温めるうちにあっというまに予定の時刻となり、最後に、次回の幹事をお願いする予定の沖電気工業（株）の古川計介氏からご挨拶をいただき、母校並びに本会の発展、会員諸氏の活躍と健康を祈念しつつ、再開を約して盛会のうちに散会しました。

なお、恒例により本総会は、基礎工学部（電気、制御、情報）出身者を含めて開催し、多数の参加を得ました。

（山元正人（電気・昭53、M昭55）記）

平成4年度澪電会ゴルフ例会

伝統の澪電会ゴルフ例会は、関西電力（株）殿のご好意で、平成4年も武庫の台ゴルフコース（神戸市北区道場町）で春・秋2回（5月16日と11月29日）開催され、新しく9人の方にご参加をいただき、懇親を深めました。優勝者は次のとおりです。

第74回（5月16日）一般優勝　西野種夫
（グロス90、HC18、ネット72）

シニア優勝　森　勝紀

（グロス101、ＨＣ15、ネット86）

第75回（11月29日）一般優勝　戸石泰司

（グロス88、ＨＣ15、ネット73）

シニア優勝　池田盈造

（グロス103、ＨＣ29、ネット74）

なお、平成5年の例会は5月29日（土）、11月28日（日）に同じ武庫の台ゴルフコースで行われる予定です。参加ご希望の方ははがきにお名前、卒業の学部・年度、連絡先（住所、郵便番号、電話番号）を書いて、澪電会事務局にご連絡下さい。期日が近づけば案内を差し上げ、申込先着24人まで受け付けます。

（松井昭夫（電気・昭30）記）

手塚慶一名誉教授ご逝去

澪電会前副会長でもあった大阪大学名誉教授手塚慶一先生(通信・昭26)は、去る平成5年1月22日午後10時26分、肝臓ガンのため大阪大学医学部附属病院にて逝去された。享年64才。

告別式は、1月26日午後12時30分より吹田市桃山台の千里会館において通信工学科倉薗貞夫教授が葬儀委員長となり、関係者多数の参列のもとにしめやかに執り行われた。なお、生前の功績に対して、勲二等瑞宝章が追叙された。

謹んでご冥福をお祈り致します。

話　題

退屈記三題
(特急雷鳥車中にて)

福井大学名誉教授
岩澤　宏
(通信・昭26)

1．幻の二水

昨年11月福岡工業大学で開かれた澪電会九州支部発足の総会で、澪電会創設の先輩山口次郎先生の御挨拶に澪電会の名称の由来についてのお話があった。その中で、「澪の字は大阪湾河口の水路の目印の杭を意味する'みおつくし'であり、三水ではなく二水がもちいられた。そこで本会の命名当時二水にと云う議論もあったが戦後に刊行された辞書にないので三水と決まった」とのことであった。しばしば二水の澪は当用漢字にないので三水としたが、あれは二水では？との話を聴く。私も当用漢字に拘る必要はない。そもそも当用漢字なるものに抵抗があり、我が愛用の字源で例えば雑は雜の俗など当用漢字には…の俗となっている漢字も多い。象形文字の長所を抹殺していて不快である。字源をみるのはたのしい。そこで澪は二水をと提言しようかと思い、念のため字源をはじめ漢和大辞典などを引いてみたがいずれにも二水の澪はないので不勉強を恥じた。三水の澪しかない。意味：川の名、川の脈、水路、河海の中にて船の通行する道筋、みお、みよ。澪標はみおつくし、水路を示す杭。一太郎Ver.3で'みおつくし'を漢字変換すると澪がでてくるのには驚いた。そこで二水の欄を引くと、いずれも、冷たい、凍るの意とある。東京に出張の際、丸善でふと新刊の大漢語辞典なるものを見附け立ち読みする。曰く、「二水：𠔃、氷の結晶にかたどる。𠔃、は氷の源字、ヒョウと読む。冫を意符として、凍る、寒いなどの意味を文字に含ます。三水の省略として二水を書くことあり」とある。ついにアンダーラインのごとく二水を用いる場合のあるのを見いだした。

結論：澪はもともと三水であり当用漢字にはない。誰か昔、大阪湾河口で二水の澪を見たとしたらそれは三水を略字でかいたもの。従って、澪は三水。毛筆にてくずし、または略字で二水は御自由にと云う処か。

2．'適当に…する'という事

よくそれは適当に処理すれば良いとか、健康も考えて全力をだすのは止めて適当にやります等と言う。私も停年退官後一年は最後の二年間administrationに専心したので休養と研究生活へ戻るための充電に当てた。昨年から私立大学で教育研究生活を始めたが、その間いわゆる'適当にやる事'が如何に困難であるかを痛感した。適当にやるとは、手抜きすることではない、人に迷惑を掛けてはならないことは勿論、何等かの結果が人に喜びを、また社会に小さくても還元でき自らにも充足感をもたらすように何気なくスマートにしなければならない。これができれば人生の達人である。'今頃、そんな事を言うのは今まで不器用さを楯にマイペースでゴリ押ししてきた付けが回わって来ただけの事だ'という友人の顔が浮かぶ。しかし、適当に…するのは困難な事に違いない。

3．二代目の役割

昨年から澪電会北陸支部長二代目を勤める事となった。歴史・現実社会でも初代は甚だしっかりしているが、どうも二代目はもうひとつというのが常である。ところが三代目は甚だ出来の良いかその逆もある。そこで、二代目の私の役割は、(1)ゆっくりと将来の方向を話し合い策定する、(2)二番打者に徹して、よりよい三代目に継ぐ、の二点である。

是、即ち2項で述べた'二代目は適当にやるべし'と云う事に他ならない。

テレビとともに

三洋電機株式会社
情報システム部
真常良雄
（通信・昭32）

昭和32年入社以来、会社生活の大半をテレビとともに過ごしたので、その発展過程を振り返ってみようと思う。

入社当時の昭和30年代のテレビ先進国は疑いもなくアメリカであり、追い着き追い越せの毎日だった。

国産第1号テレビ発売は昭和28年で、当社も同年に第1号機を発売しているが、17型で実に19万5千円だった。当時の初任給が1万円以下だったことを思えば、それが如何に高額であったかがわかる。しかし昭和30年には、14型で10万円を割ることに成功し、本格的な普及前夜を迎えていた。

昭和31年頃には、テレビの新工場が竣工し、翌32年には、通信工学科から私を含め、一挙に4名が入社したことでも会社の意気込みがわかる。

テレビの歴史は、技術的には白黒からカラーへの移行、真空管からトランジスタへ、創意工夫による価格の引き下げ、ブラウン管の発展、リモコンなどの付加機能の開発などに要約される。

白黒からカラーへの移行は、昭和35年にカラー・テレビが発売されてから、ほぼ10年間で決着がついた。トランジスタ化は、昭和40年に白黒でトランジスタ化が始まり、わずか5年後の昭和45年には、カラーも含めてオール・トランジスタとなって決着した。

価格の引き下げは、白黒では14型で昭和30年に10万円を切り、35年に6万円、そのあとしばらく大型化と付加機能競争に走るが、45年に5万円を切った後、ＩＣ化と小型化が進むとともに前述のように大勢はカラーに移行した。

ブラウン管の発展も目覚ましかった。白黒では昭和30年に電磁フォーカスから静電フォーカスへ、31年に90度偏向、35年に110度、カラーでは、38年70度、43年90度、47年110度ブラックマトリックスへと進化した。

付加機能といえば、リモコン操作が筆頭であろう。私自身、この分野を担当したので、振り返って感慨ひとしおである。昭和34年に白黒テレビで、ケーブルによる有線リモコンを導入し、38年には業界初の超音波リモコンを、カラーテレビでは41年に採用、46年に「ズバコン」の名称で大々的に宣伝もし、大ヒット商品となった。

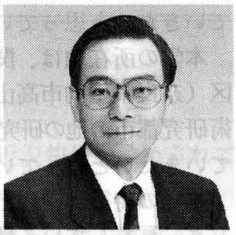
しかし、舞台裏でその技術を担当している者には、数々のトラブルとの悪戦苦闘であったことが懐かしい。リモコンはその後、超音波から赤外線方式へと発展するのだが、超音波時代には、リモコン本来の超音波以外に、この世に存在するあらゆる超音波源との識別との戦いであった。

発売当初は、今思えば、無謀にも無変調波であったので、例えば、家庭での電気掃除機の吸い込み音、ジェット機の飛行音による誤動作に散々悩まされたが、すぐに、誤動作防止のための色々な変調を試み、JIS化の運びとなった。

一方、超音波を送受信するのは、超音波専用のスピーカとマイクなのだが、長年に渡って特性を維持するための材質の開発には、えも言われぬ苦労をしたことが懐かしい。

今、ハイビジョン・テレビを頂点とする画像技術、コンピュータによるディジタル化技術、レーザーを中心とする記録再生技術などが一堂に会しいわゆる、マルチメディアの時代を迎えたのであるが、それが家庭にも入り込み、万人がその恩恵に浴するには、今、少し時間がかかると思われるので、これから、学窓を巣立って行く諸君の活躍に大いに期待したいものである。

私のリフレッシュ



ディスプレイ・
テクノロジー(株)
島　　亨
(電気・昭36)

「滝電」第1号に拙文を載せていただいた記憶があるから、あれから15年近い年月が経ったことになる。

ソ連邦の崩壊、東西冷戦構造の解消、南北対立の激化、バブル経済崩壊…書き連ねるのも、もどかしいほどに、ここ数年の時代の変わりようは激しく急である。

ますます1秒、1時間、1日の価値が上り「時間」が貴重になってきていると考えるべきである。

さて、前置きが長くなったが、最近仕事を変わり、またまた「エキサイト」を楽しんでいる。

異業種というと大方の皆さんから大袈裟なと叱られそうだが、30年担当した半導体から液晶ビジネスへ鞍替えした。

何〜だ！似たような仕事じゃあないか！とおっしゃる方が多いかも知れないが、小生としては殊更にも自分に言い聞かせるほどの覚悟である。

エレクトロニクス分野の部品業界という意味では似た業種といえるが、小生なりに考え着任前には半導体と液晶の類似性は30%、非類似性は70%と想像をしてきた。

例えば鉄鋼や化学の方が半導体、液晶業界へ入って来られる時に感じる「違和感」に比べれば隣へ移るようなものだろうとの考え方はあるが。

さて、やってみての感じは、30%・70%の考え方が技術、市場、経営の視点からみてピッタリ当て嵌まる。

液晶事業は半導体ビジネスの15年あとを追いながら今世紀末から21世紀にかけて成長する期待のビジネスと位置づけられている。今はまだまだインフラを含めてプリマチュアであるという意味も含めてである。

酷しい不況下で、数少ない期待の業種とやらで液晶メーカーのみならず、設備メーカー、材料メーカー等、新旧とりまぜて鎬を削っているが、生産効率、投資効率とも十分でない。設備投資が大きい割に、ロー・リターンである。

付加価値についても半導体は設計から製造までスルーして85%は企業内でつけられるが、液晶の場合は購入部材の比率が高く、その半分位しか内部付加価値化できない。もっともその分パートナーと苦楽を共にする共生感はある。

類似性のあるプロセス技術についてもHDD（メタル材料)、半導体（半導体材料)、液晶（ガラス材料）を比べると導体から絶縁物と材料の種類とプロセス、設備そしてハンドリングの仕方まで異なってくる。品質・信頼性をとってみても、単にFitやppmを論ずるだけではなく画面を通じて人の視覚に訴える商品だけに画質、品位の問題となる。また、色の種類や何万色という数だけでなく暖色系、寒色系、果ては好悪の問題にまで行き着く。まさに色の道は深い。(と聞いている。)

価値観は視点、立脚点、あるいは嗜好、趣向によって来る。

国際強調を言い、また東北セミコンダクタ（株)、ディスプレイ・テクノロジー（株）という日米の合弁会社経営を経験させてもらうと尚更この感を深くする。冒頭の時代の変化もまさにこの価値観の変わり様を表している。

ともあれ、21世紀に翔く液晶事業という若い恋人をえて、まさに「リフレッシュ」される今日この頃である。

奈良先端科学技術大学院大学について

奈良先端科学技術大学院大学
情報科学研究科教授
情報科学センター長
山本平一
（通信・昭38、M昭40）

昭和40年に阪大を卒業して電電公社電気通信研究所に就職して以来これまで28年間無線通信の研究に携わって来ました。この間にディジタルマイクロ波通信、衛星通信、移動通信の研究開発を行ってまいりました。特に最後に開発した携帯電話ムーバは印象に残っています。

昨年7月に28年間のNTT研究所での研究生活を無線システム研究所長を最後として終了し、このたび奈良先端科学技術大学院大学に奉職することになりました。卒業以来28年ぶりに関西に帰ってきたこと、また初めて大学の教官になったことで戸惑っています。

本大学は大学院だけの大学として設立されたものであり非常にユニークな大学であります。教官の出身大学は阪大、京大を中心に九大、名大などからであります。研究科は情報科学研究科とバイオサイエンス研究科の2研究科から構成されています。

情報科学研究科は17講座と3つの客員講座で構成され、学生定員は博士前期課程125名、博士後期課程37名であります。教官の平均年令も若く教授が46才、助教授が32才であります。先端科学技術は急速に進展し、情報科学の分野での若手研究者の育成や社会人の再教育が必要とされています。このため、本学では、学部に3年以上在学した優秀な者への入学の途を開くと共に、優れた資質を有する者には前期課程2年を1年以上、後期課程も1年以上（前期課程又は修士課程に2年以上在学した者）在学すれば足りるとする短期修了を認めています。さらに、入学者の多様化を図る観点から、学部卒業者だけでなく、社会人や専門分野以外から例えば文系の人でも入学できるようになっています。カリキュラムも専門分野以外からの入学者も充分対応できるように配慮がなされています。最初の学生は、本年4月に入学します。

特に、本学は学部を持たない大学院だけの大学であるため、大学と産業界との共同研究や研究者の交流、産業界からの学生受け入れや客員教授等、産学共同を強く進めて行くことによって本学を発展させていきたいと思っています。

本学の所在地は、関西文化学術研究都市の高山地区（奈良県生駒市高山町）にあり、この関西文化学術研究都市の他の研究機関等との積極的な協力を行っていきたいと思っています。

本学の特徴は、以上述べたことだけでなく私がセンター長をしている情報科学センターの内容にあります。この情報科学センターは、情報科学およびバイオサイエンスの分野における先端的研究環境と充実した大学院教育環境を提供するものであり、超高速ネットワークと分散処理環境を基盤とした本学の情報環境の運営と、先端科学技術の教育・研究を支援する情報処理環境の構築を目的としています。この情報科学センターのシステムを統合情報処理環境「曼陀羅」と称しており、これには統合情報ネットワーク「曼陀羅ネット」と情報処理システム「曼陀羅システム」から構成されている。

「曼陀羅ネット」は、超高速キャンパス基幹ネットワーク（1Gbpsの転送速度を提供するUltra Net）、研究科内基幹ネットワーク（Ultra Netハブを中心としてスター状にルータを配置し、ルータ／ハブ間を125Mbpsで接続）、各フロアサービスネットワーク（Ethernet 4系統とFDDI 2系統）という3つの階層に分けて構成されている。このように、本学の学内ネットワークは非常に高速化されており、今後のマルチメディアデータやトラヒック増にも充分対応できるようにしている。また、広域ネットワーク接続としては、ディジタル専用線を用いて東京、京都、大阪と接続しています。

「曼陀羅システム」は、個人用ＷＳと共用各種サーバ（大容量ファイルサーバ、計算サーバ、プレゼンテーション支援システム、マルチメディア情報処理システム、等）とで構成されています。学生および教官は一人一台の個人用ＷＳがあり、これと上記「曼陀羅ネット」を用いることにより全学の情報環境を自由に利用できる優れた情報処理環境にあります。

大学院大学という初めての試みが成功するように私だけでなく全教官が努力しておりますが、これは前に述べたように産学共同が重要な鍵になると思いますので、産業界の方々の御協力を最後にお願いいたします。

退官された先生方の近況

塙　輝雄

昨年の本誌4月号のため、近況報告を求められていました所、折悪しく病気にかかり、締切に間に合わず、1年遅れで責を果たす次第です。

大阪工業大学に移ってから早や4年が過ぎました。1昨年以来、力学に加えて、大学院生に表面物理を週1回（前期）教えています。何れもマンネリズムに堕さないよう毎年何らかの工夫を加えることにしています。表面の講義には土木や建築を含め、全学科から受講生がありますので仲々張合いがあります。以上のスケジュールではかなり暇が出来るので、薄い本の一冊位は書き度いと思っています。しかし時は余りにも速やかに過ぎ、90年末に“実用真空技術総覧”というハンドブックを編集、出版して以来、目的を果たさずに居ります。

さて、昨年罹った病気“ヘルペス”について一言触れておき度いと思います。最初の兆候として胸部に出現した、小さなミミズ位の赤い一本の筋は4、5日で急激に帯状となり背中まで回りました。これは唯事では無いと気付き、微研病院で診察を受けました所、即座に入院治療開始と宣告され、特効薬を8時間毎に1週間注入されることになりました。初期に治療を始めたら3日で良く、後遺症も軽くて済んだとの事です。私の場合は手遅れのため、退院後1カ月間、世にも痛い神経痛に見舞われ、体力、気力共に大いに消耗してしまいました。皆様も上記の兆候が出たら、一日も早く病院に行かれるよう、助言したいと思います。幸い現在は完全に直りましたので御安心下さい。

さて痛みが薄らいで来ますと、時は春、忽ち旅心が湧き起こりました。病気上がりの事ですから大事をとって、近くの国、台湾へ出掛けました。5日間ガイドを雇って回りましたので楽で自由な旅を楽しむ事が出来ました。8月下旬から9月上旬にかけて17年振りにベルリンを訪ねました。フリッツハーバー研究所で旧友と会い、博物館を巡り、旧東独の一部を旅して来ました。東の状態を一寸見ただけでも、コール首相の“統一は失敗であった”と云う発言は本音であったことが実感されました。

10月下旬には名古屋で開催された第3回低温核融合国際会議（ICCF－3）に出席しました。会議はかの有名なポンス、フライシュマン、およびジョーンズ各教授を始めとして約400名の参加者を集め稀に見る活気溢れたものでした。重水素－Pd系における過剰熱発生現象には疑問の余地は無く、若干の軽水を含む系でも核反応生起の可能性が示され、小生もこの魅力的な研究分野の戦列に加わり度い気持ちが燃え上がりました。現在も熱が下がらず、模索を続けています。また、春休みには映し貯めたビデオを編集して見物に耐えられるドキュメンタリー作品にしたいと考えている所です。

（勤務先　大阪工業大学一般教育科、自宅住所　〒567 茨木市北春日丘1-12-3）

熊谷信昭

平成3年8月に大阪大学総長の任期満了とともに長年お世話になった大阪大学を退官して以来、早くも1年8カ月の歳月が経過しました。

お蔭様で、その後も毎日元気に楽しく過ごしており、現在も政府の各省庁関係の仕事としては文部省大学設置・学校法人審議会委員、放送大学学園運営審議会委員、郵政省電気通信技術審議会委員、郵政省電気通信フロンティア研究推進委員会委員長、郵政省通信総合研究所顧問、科学技術庁原子力利用長期計画委員会委員、防衛庁技術研究本部顧問等々をつとめています。この他、中央の関係では日本放送協会放送技術審議会委員、日本学術議会電子・通信工学研究連絡委員会委員、理化学研究所相談役等々の仕事があり、平均週2、3回は東京に出ています。

また、地元では大阪府教育委員会委員長、大阪府総合計画審議会会長、大阪府ベイエリア開発整備構想検討委員会委員長、大阪市総合計画審議会会長、大阪市テクノポート推進協議会委員長、国際文化公園都市懇話会委員長、大阪府日本中国友好協会会長、(財) 大阪府文化振興財団理事長、(財) 兵庫科学技術創造協会理事長等々の仕事をしています。

これまでの専門に近い仕事としては光量子科学技術推進会議の会長や近畿ニューメディア推進会議副会長、関西サイエンスフォーラム座長、国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) 特別顧問等々があります。

大阪大学の関係では阪大医学部付属病院跡地利用構想検討委員会会長から「阪大アメフトを優勝させる会」会長等にいたるまで、いくつかの関係が続いています。

変わったところでは、(仮称) 大阪ドーム建設検討委員会の委員長やセンチュリーオーケストラの理事長、はては「大阪まちかど再発見の会」座長や「なにわ塾」塾長などといったものまであります。

その他、各種の財団の理事長や理事、評議員だけでも30をこえ、役職の数を数えあげていくと現在約140にも達しており、退官後に期待していたような時間的余裕はとても作れそうにありません。

今、私が主たる拠点としているのは昨年3月に設立された株式会社原子力安全システム研究所で、私はその代表取締役社長をつとめています。この研究所は関西電力の全額出資によって作られたもので、法人形態は株式会社ではありますが、その実態は原子力発電の安全性と信頼性の一層の向上を目指して、技術的側面と社会科学的ないしは人間科学的側面の両面から第三者的・客観的な立場で研究する世界的にもきわめてユニークな研究機関で、関係者の間では国の内外から注目を浴びています。この研究所は現在は大阪市内にありますが、研究所本体は今年の5月に関西文化学術研究都市の中心部である精華・西木津地区に移り、同時に大阪市内の堂島にも大阪センターを設置します。大阪センターは我々の研究所の大阪市内における諸活動の拠点となるもので、この4月末に新しく出来上がる堂島川に沿った高層ビル (アクア堂島) の最上階に作られることになっています。大阪駅にも近く大変便利な場所で、素晴らしい景観も楽しめそうなので、お近くにおいでの折にはお立ち寄り下さい。私へのご連絡等はここへして頂くのが最も早く、かつ確実であると思います。なお、近い将来には福井県下にも大規模な研究所 (仮称福井研究センター) を作ることにしています。

もう一つ、私にとって比較的ウエイトの高い仕事として (財) 地球環境センターの理事長という職があります。これは、日本で二つ目、西日本では初めての国連機関として昨年10月に大阪に誘致されたUNEP国際環境技術センターの活動を支援し、このセンターと連携して環境問題に関する各種の事業を行うために昨年1月に設立された財団で、この両センターの建物が「花と緑の博覧会会場」跡に、博覧会開催時に建てら

れた迎賓館をもそのまま全部中にとり込んで今年9月に完成する予定になっています。そのなかにも私の理事長室が出来ますので機会があればお立ち寄り下さい。

以上のような次第で、これまでの電子・情報・通信工学の分野に加えて、エネルギーや環境問題、それに地域開発や地域文化の振興等といった分野の仕事にも関係することになり、おつき合いの場が従来よりもさらに大きく広がるとともに、今まであまり接触のなかった新しい世界の方々とお目にかかれる機会も増え、日々貴重な経験や勉強をさせて頂いています。少し忙し過ぎるきらいはありますが、それもこれもすべて天命と素直に受けとめ、充実した日々を楽しく過ごしています。

澪電会会員の皆様の変わらぬご交誼とお力添えをお願い申し上げますとともに、もし私で何かお役に立てるようなことがあれば、私の力のかなう範囲で多少ともお役に立ち得ればと思っています。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

（通信工学科昭和28年（旧制）卒　大阪大学前総長・名誉教授）

卒業生の近況

前川　太市（電気・昭22）

1983年に35年間つとめた教員を定年でやめ、技術翻訳業を始めて満10年になる。その間＜月給＞と称するものを貰ったことがなく、改めて、つとめ人はありがたいなと思う。

仕事は最初の頃は英語、とくに和文英訳が多かったが、ここ2、3年はドイツ語の仕事がふえる傾向にある。こんなささやかな仕事にも国際情勢と経済界の変動の影響があるようだ。

仕事の内容は多岐にわたるが、私にはどちらかといえば論文のような固いものが性にあい、かえって修理マニュアルのようなものが難しい。

当然のことながら、語学も技術も無限に深いことを実感する毎日だが、仕事を通じてこれらを学べる喜びがある。とはいえ、良いことばかりでなく、この仕事の最大欠点は運動不足であり、特に納期をせかされる場合に多い。そのため、日常はできるだけ歩くことを心掛け、暇を見つけては自己流のフリープラン海外旅行を（語学研修！）試みている。

（自営：前川技術翻訳事務所）

佐内　重正（電気・昭24）

敗戦直後で食べることすら事欠く状態で学生生活をおくりやっと卒業はしたものの、世は未だ混沌の就職難の時代でした。それでも諸先生方の御尽力もあってなんとか関西電力に就職出来たのは僥倖とも思われるくらいでした。

入社して5年間は通信関係、その後送電関係に転じ28年間勤めましたがそれなりに社会に貢献出来、有意義であったと思っています。

このあと関係会社の（株）新日本技術コンサルタント（現ニュージェック）に出向を命ぜられ、50の手習いの覚つかない英語を使いながらとは言え東南アジア特にフィリッピン・インドネシアを主体に電力設備建設のコンサルタントの一員として15年余全力を傾注出来たのは倖せであったと思うとともに、ささやかながら我が国の海外援助の一端を担うことが出来たと自負しています。

今は一線を離れ顧問として残っていますが、サラリーマン卒業の日を間近に控え余生を如何に有意義に過ごすかを模索している今日此頃です。

後輩の皆さんが大いに飛躍される様願っています。

（(株）ニュージェック）

永田　　領（通信・昭26）

鉄鋼をはじめとする基幹産業のプロセスオートメエションにおける重量計測・制御、POSシステムとしてストアオートメエションの一端を担うコンピュタ料金はかり、航空機・自動車の車体設計に研究設備として使用される力計測装置等々。

1951年はかりメーカーに入社以来一貫して取組み、重量・力計測のエレクトロニクス化の歴史と共に歩んでまいりました。この間欧米をはじめ、広く海外にも進出し、この分野の技術発展に寄与し得たことは幸せであったと思っております。

通信工学出身としては、いささか異分野を選択いたしましたが、今日の計測・自動制御技術の多くが、通信工学にそのみなもとをなすことを痛感、有り難く感じておる日々であります。

（大和製衡（株）　常務取締役）

嶋田　利定（電気・昭27）

関西文化学術研究年の生駒市高山地区に新設される「国立奈良先端科学技術大学院大学」が、本年4月に開校しました［桜井　洸学長（応化・昭17)、嵩　忠雄情報科学研究科長（通信・昭33、M昭38)］。本大学の教育研究、国際交流、産学交流活動などを支援するため、一昨年6月に官・財・産各界による支援財団が発足し、近鉄より派遣されて忙しい毎日を送っています。初年度は情報科学研究科が、次年度からはバイオサイエンス研究科が開講されます。さらに2年後には、周辺に企業研究所も進出してサイエンスタウンが完成します。かくしていずれの日か

青丹よし　なら高山は　先端の　科学研究　いまさかりなり

ノーベル賞　ふりさけ見れば　高山の　先端科学で　いでし成果も

と詠まれる事を期待しております。

（奈良先端科学技術大学院大学支援財団専務理事）

戸田　保一（通信・昭29）

「証券会社は情報とコミュニケーションを基盤とする企業」という認識をもった野村証券が、通信工学系の学生4人を初めて採用した昭和28年に、私は野村の一員となりました。ただし努力不足で卒業は29年次。そして昭和30年に使い始めた真空管式から今日まで、38年余のコンピュータ人生。利用の現場から見たコンピュータ関連技術の進歩は目覚ましく、月日の経つのも早く感じました。60才で野村総合研究所副社長を退任し、株式会社CSKに入社して3年、8,000人の若者たちとシステムに明け暮れる昨今です。また、東工大

と東京電機大で、経営工学・システム工学の非常勤講師も務めさせていただいております。生涯一ＳＥ（システムエンジニア）であることを念じつつ、今後とも精進を続けたいと思っています。
（(株) CSK　取締役副会長）

宮崎　和彦（電気・昭35、M昭37）

1990年初夏、文部省在外研究員として独・Würzburg大学に滞在した。折りしもサッカーの世界選手権大会が開催中で、街も大学もかなりエキサイトしていた。私も中学・高校（広大・附属）時代サッカーに親しんだので、独チームが出場するたび友人邸に誘われ、フランケンワインのグラスを片手に、テレビ観戦を楽しんだ。独の夏は日の暮れるのが遅い。一夕、友人邸を辞する際、西の空の夕映がすばらしかった。思わず、北校の頃に学んだローレライの詩の一節 “im Abend Sonnenschein” が口をついてでた。

入学の時から助教授時代までの25年を過した母校阪大から鳥取大学に転任して10余年、最近レーザー研で共同研究（装置利用研究）を開始、今後の進展を期しているが、本務校の地から新幹線へのアクセスがも少し容易だったらと痛感している。
（鳥取大学工学部電気電子工学教室教授）

成戸　昌司（電気・昭41）

入社して24年間は地元伊丹製作所で電車用制御装置の開発設計に携わりましたが、ここ3年東海旅客鉄道(株) リニア開発本部に出向し、山梨リニア実験線建設の国家的プロジェクトに参画しました。主として列車制御システムの開発を担当しましたが、リニアでは列車を地上から制御する点や電気・車両・土木などの各分野の協調がより強く求められる点が在来の鉄道と大きく異なります。それだけに広い範囲の技術に触れ、また大きなプロジェクトの進め方について勉強が出来た期間でもありました。

この1月に出向から本社（東京）に帰任しましたが、これまでの経験を生かして21世紀のリニア新幹線を含めた新しい交通システム作りを目指したいと思っています。
（三菱電機（株）　交通システム計画部）

伊藤　　周（電気・D昭43）

卒業後、帝人（1968～75）と東洋情報システム（～1990）では、もっぱら、情報システムの開発や営業に従事しました。現勤務先では初めて研究業務に就きました。ささやかな陣容ですが、「小粒ながらも、味のある」研究をめざしています。

「三人寄れば文殊の知恵」と言いますが、それに近い陣容で、文殊の知恵の支援システムに取り組んでいます。「三人寄る」ことは、同時／同場所に集まることを想定していますが、それには相応のコストがかかります。非同期／場所でも、文殊の知恵が出易くするには支援システムの機能や運用方法をどうすれば良いか？

「組織内の知識統合支援システム」という題名で、学会発表を予定しています。

溌電会員各位のご指導ご鞭撻をお願いします。
((株) 東洋情報システム技術研究所)

近藤　和夫（電気・昭47、M昭49、D昭52）

1977年富士通（株）に入社。研究所、事業部を経て、1992年から山梨県にある富士通カンタムデバイス

（株）に勤務している。研究所、事業部では、化合物半導体の研究・開発に従事してきた。

富士通カンタムデバイスは、化合物半導体の専門工場であり、衛星放送や携帯電話に用いるμ波デバイス、光通信に用いる光デバイス、超高速の情報・通信システムに用いるGaAsICなどを製造している。化合物半導体ビジネスは今後とも着実な伸びが期待されるが、昨今の企業環境は非常に悪く、損益改善と企業体質の改善に知恵を絞る毎日である。『企業は人なり』を実感することが多い。

家族は妻と子供3人。単身赴任のため、週日は気楽な一人暮らし、週末はできる限り家族と過ごすようにしている。

最後に澪電会の皆様の益々のご発展をお祈り申し上げます。

（富士通カンタムデバイス（株）　デバイス技術部長）

名田　満（電気・昭58、M昭60）

60年入社直後、不況におそわれ新日鉄を始め鉄鋼メーカーは相次いでエレクトロニクス・情報通信事業にのりだし、鉄に次ぐ事業として現在でも相当の力を注いでいますが、私はそういった分野と関係なく、主な製品がトヨタ自動車向け表面処理鋼板である名古屋製鉄所に勤務しております。昨年12月まで約三年間、熱間圧延工場のリフレッシュ化工事の企画・設計・試運転立ち上げ責任者として携わってきました。私の守備範囲だけでも数十億円の投資で、世界最大級のサイクロコンバータ制御の圧延モータを導入しましたが、業務内容上、電気のみならず、システム・機械・建築といった分野の勉強にもなり、また現場の人達との付き合いが多い為、蛮カラな私の性格が助長された貴重な経験となりました。

さて、私生活の方ですが、現地調達の妻と二人の子供に見送られながら、築30年の堅牢な社宅から自転車で通い、休日は温水プールやテニスを楽しむ比較的健康的な日々をおくっています。

（新日本製鐵（株）　名古屋製鐵所設備部電気計装技術室）

薮内　孝恒（電気・平1、M平3）

阪急電鉄に入社してはや2年が過ぎようとしている。入社当時は予想もしていなかった集合住宅の設備担当となり、ゼネコンとの打ち合わせや近隣との折衝、工事現場の管理との業務に現在携わっている。バブル崩壊の影響を受け、マンションの分譲事業を含めた建築界の逆風は今なお吹き続けているが、このような時期にも好調な物件があり、的確な商品企画によって、購入者のニーズを満足するコストパフォーマンスに優れた商品提供の必要性を痛感しております。大学時代に教わった専門とは関連性の薄い分野ではありますが、様々な業種や年代の人と接する機会があり、この出会いの中から良質なサービスの提供という命題の答えが見つかるのではないかと考え、日々を過ごしております。

（阪急電鉄（株）　都市開発部開発第三課）

留学生の声

Phota Wachiraphan（電子工学科M１）

1987年4月6日、私の一生に大きな影響を与える記念すべき日でした。その日は私の留学生活が始まりました。思いもよらぬ日本留学の始まりです。

高校のとき、ずっとタイのCHULALONGKORN大学にあこがれました。高校１、２年に一般の授業よりタイの大学へ入るために入試の勉強をしていました。しかし、高校の最後の年に衝然の出来事が起こりました。私が思いもよらなかった日本奨学金の試験に合格しました。そのときに、私はうれしさと不安で混乱一杯の気持ちでした。それは合格したうれしさの上にこのままタイの大学にがんばるかまたは日本に行ってどうなるかという不安があったからです。

タイにいたときは、日本へ留学する人が少なかったため、あまり日本のことはよく知りませんでした。そのときは、日本といえば、経済・技術の大国という印象でした。経済大国といえば人々がよく働いて、技術の大国といえば人々がよく勉強するという考えしかなかった。そのために、人々の相性・性格などの面が逆にあまり好意ではないというイメージがありました。

しかし、実際に日本に来てからだんだんそういうイメージが変わって来ました。私は東京での日本語学校のときにあまり日本人と知り合う機会がなかったので、本当に友達といえる日本人がたった一人だけでした。それから一年、大阪大学に入って、日本人との付き合いする機会ができました。幸にも同じタイ人の友達が一緒に大阪大学の電気系に受かりました。大学に入ってから、約半年だけそのタイ人の友達と日本人の友達のグループができました。私達は日本人の友達とずっと一緒に勉強したり遊んだりして来ました。今でもまだその日本人の友達と付き合っています。私は日本人と付き合って一番うれしいのは、日本人が私達を外国人の友達として扱うことではなく、普通の日本人と一緒に友達として付き合ってくれることです。

私としては、日本人でもタイ人でもよく似ていると思います。タイ人の中でも悪い性格を持つ人がいれば、日本人にもそういう人がいるということも当然です。どういう人と知り合うのかは運命ですが、友達を選ぶのは自分です。そこで、日本人でも、言葉のかべを越えるのは友情です。

安莉（電気工学科M２）

大学卒業が十年前の1983年でした。ちょうど十年後1993年にもう一度卒業の日を迎えました。人生には幾つかの十年があるが、次の十年後どんな“卒業”を迎えるのでしょうか。

中国の“文化大革命”期間に、中学生、高校生たちを農村に送られ、“挿隊”ということが何年間に続きました。実はその時の青年たちは大学に入りたがってもできなく、毎日農民たちと一緒に仕事をしなければなりませんでした。厳しい苦しい環境にそれらの青年たちが農民の“再教育”を受けることを今思い出しても涙が流します。

1977年に中国の大学試験を再開した時、これらの“再教育を受ける”人たちも三十歳近くでした。1979年に私が大学に入った時、先輩の姉ちゃん、兄ちゃんたちと十歳ぐらいの年齢差がありました。今、同研究室の日本人学生と一緒に勉強する時、姉ちゃん、兄ちゃんのあの時の気持ちがよく分かりました。

日本での中国人留学生たちが人生の目標を追求しながら、いろいろと苦労しています。この苦しさは前の姉ちゃん、兄ちゃんたちの苦しさと比べますと感心しました。だが、区別はここは外国で、国内の農村ではありません。このような留学生活は中国で“洋挿隊”と言います。“幸福が苦境からくる”と言う中国の諺があり、先輩の姉ちゃん、兄ちゃんたちはもう中国の各領域の中堅分子になりましたが、我々はどうなるかなと考えています。

あっという間に三年間、そろそろ阪大と別れる日が近づいて来ます。電気工学及び松浦研究室の先生と学生たちに色々お世話になりました。感謝の気持ちは一言で言い表せないですが、心からお礼を申し上げます。

講座紹介

通信工学基礎論講座

教授　長谷川　晃
（通信・昭32）

本講座は、通信工学における基礎理論に関する教育と研究を担当することを目的として、昭和15年通信工学科創設とともに設置された。昭和15年4月から昭和19年9月までは七里義雄教授、昭和19年9月から昭和42年2月までは熊谷三郎教授、昭和42年9月から昭和46年3月までは青柳健次教授、昭和46年6月から昭和62年3月までは熊谷信昭教授が本講座を担当した。平成3年9月からは長谷川が本講座の教授を務め、現在に至っている。

設置当初から現在に至るまで、研究内容の詳細は逐次変遷したものの、本講座では一貫して通信工学の基礎となる電磁理論、回路理論、電磁波工学、量子電子工学等の理論と応用に関する研究に携わってきた。現在、講座を構成する教職員は長谷川晃教授、松原正則助教授、松本正行講師、戸田裕之助手、熊谷範子事務補佐員の5名であり、大学院後期課程1名、大学院前期課程11名、学部4年8名の計20名の学生が本講座に所属している。現在取り組んでいる主な研究テーマをまとめると以下のようになる。

1）ソリトンを用いた光ファイバ通信に関する研究

光ソリトンは、従来の線形光通信方式においては信号の歪みをもたらす不都合な特性として働くファイバの非線形性と分散性を積極的に利用し、これらをバランスさせることによって作られる安定な光パルスであり、これを情報伝送のビットとして用いることによって大容量長距離の光通信システムを実現することが期待できる。本講座では、光ソリトン通信の伝送容量を制限する様々な問題点を解決することや、光ソリトンの特長を活かした新しい通信方式（固有値通信や信号と雑音の分離が可能な通信など）を提案し、その実現可能性を検討すること等を目的として研究を進めている。また、平成4年度からは文部省科学研究費（特別推進研究）が交付され、10ギガビット／秒×4チャネル、伝送距離1万kmのソリトン通信システムの実証を目標とするソリトン伝送の実験を開始した。

2）電磁界問題の電子計算機を用いた解析法に関する研究

現在、電磁波の実用的な利用は通信ならびに非通信の分野とともにマイクロ波からミリ波へと高周波数化・多様化が進み、また、光領域もファイバ通信を始めとして広く実用化されている。このような背景のもとで、電磁波素子の解析手法も単に動作原理を解明するものから実用に耐える特性を得るための素子が設計できるものへと要求が高まっている。この要求を満たす解析手法として、電子計算機を駆使する数値解析法が注目を集めている。本講座では、有限要素法や境界要素法などを基礎とする、電磁界問題解析のための効率の良い安定な数値計算法を考案することを目的として研究を進めている。

3）能動および非線形光素子に関する研究

通信および情報処理の分野における光の利用が進むにつれて、従来の受動・線形光素子にはない多様な機能をもつ能動および非線形光素子の開発が活発になっている。本講座では、面発光半導体レーザや導波路形波長変換素子など、今後幅広い応用が期待される新しい光素子に関して数値シミュレーションを中心にした理論的な研究を行っている。

社会情報システム工学講座

教授　鈴木　胖
（電気・昭33）

情報システム工学科社会情報システム工学講座は情報処理の技法、システムの分析の手法を駆使して、工学システムのみならず社会システムの問題分析あるいは計画策定を行うことを目的としており鈴木胖教授、朴炳植助教授、金寛助手をはじめ学部学生、大学院生の約20名が所属している。

本講座は前身である電気工学科組織工学講座の時代から、10年以上の歳月をかけて、大規模な地域社会経済統計情報データベース、およびこのデータベースに基づく多分野への応用を目指した総合地域計画モデルを開発してきた。

地域社会経済統計データベースは、近畿地域を対象とし、基本社会統計指標を入手できる最小の行政単位ごと、すなわち市区町村ごとに人口、就業構造、土地利用、交通ネットワーク、住宅などの詳細データを、1970年から最新の1985年まで、データベース化したものである。近畿には現在市区町村は418ある。それぞれについて、例えば人口は各歳年齢階級別、男女別、既婚・未婚の別（出生率に関係する）にデータがインプットされている。就業構造も工業統計表、事業所統計表にあるもっとも詳細な就業者数がインプットされている。

地域総合計画モデルは、418の市区町村を118のゾーンに集約し、データの統計的解析にもとづいて構築された人口、産業、土地、交通（時間距離）を表現する4つのサブモデルから構成されている。このモデルにより、20年～30年にわたる超長期の近畿の将来像をゾーンごとに詳細に描き出すことができる。

モデルによる予測結果もまた地域社会経済統計データベースに格納されている。すなわちデータベースは実績値だけでなく、統計的有意性を確認された予測値を保有しているという他に類のない特長を備えている。データベースはX Windowのもとで動作するinformix－SQLを用いて関係データベースされており、独自に開発したユーザフレンドリーなグラフィックインターフェースを介して、各種の検索、グラフ表示、地図表示ができるようになっている。また表示されている予測結果がどのような構造的要因にもとづいて得られたかを追跡する解釈・診断システムも備えている。

モデルの詳細は国内学術雑誌だけでなく、米国のJ. of Urban Planning and Development誌にもいくつかのパートに分けて報告されている。このモデルは大規模地域開発プロジェクト（例えば関西国際空港の建設）の地域への社会経済影響分析、府県や大都市の長期総合計画の策定、住宅政策の効果の分析、水道計画、エネルギー需要の予測などさまざまな用途に応用された実績をもっている。モデルは新しい統計データが発表されるたびに更新されており、モデルの精緻化、モデルのより広い分野への応用が絶えずはかられている。

母校のニュース

手塚慶一先生退官記念祝賀会

平成4年3月に工学部通信工学科教授を定年退官された手塚慶一先生の退官記念祝賀会が、同年10月24日（土）にロイヤルホテルにて開催された。手塚慶一先生ご夫妻のご臨席のもと、大学・学協会関係者、知人・友人、卒業生など400余名の多数の方々のご出席を頂き、会場は超満員の盛況となった。

当日は、まず午後4時30分より桐の間にて、産業科学研究所北橋忠宏教授の司会のもとで記念講演会が行われた。（株）ATR副社長葉原耕平氏より「用語からみた電気通信のエピソード」、京都大学工学部長谷川利治教授より「ディジタルダイナミックデータ伝送システムから広帯域ISDNまで」の題目で、ご講演を頂いた。

引き続いて午後6時よりロイヤルホールにて、通信工学科長谷川晃教授の司会のもとで祝賀パーティが開会された。まず実行委員長裏克己教授より挨拶並びに手塚先生の業績紹介が行なわれ、次いで来賓祝辞として、大阪大学を代表して金森順次郎総長、工学部を代表して大路清嗣工学部長が先生の永年にわたる功績を讃えられた。さらに他大学を代表して東京大学工学部秋山稔教授、京都大学工学部木村磐根教授がお祝いの言葉を述べられ、門下生を代表して大阪大学経済学部真田英彦教授が、先生のお人柄

や過去のエピソードを交えつつ先生への謝辞を述べられた。引き続き裏克己実行委員長から記念品贈呈が行われ、手塚慶一先生からご出席の方々にご挨拶の言葉が述べられた。最後に、熊谷信昭大阪大学前総長のご発声で参会者一同乾杯の杯を挙げ、祝宴・歓談に入った。

多数の参会者で祝宴は大いに盛り上がり、先生を囲んで和やかな歓談の一時を過ごし、またたく間に時間は過ぎていった。パーティも後半を迎え、手塚先生の元秘書お二人より先生ご夫妻に花束贈呈が行われた後、満場万雷の拍手の中を先生ご夫妻が退場された。最後に実行副委員長の倉薗貞夫教授より閉会のご挨拶が述べられ、名残惜しい中を散会となった。

なお手塚慶一先生は、その後も関西大学ならびに学協会などで活躍されておられましたが、誠に残念なことに平成5年1月22日に、肝臓ガンのため急逝されましたことを付記し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（岡田博美（通信・昭45）記）

情報システム工学科棟竣工披露記念式典ならびに祝賀会開催

電気系の建物の北側（産研側）に平成3年10月から建設が開始されていた鉄筋コンクリートタイル貼り6階建て、総面積2,652m²の情報システム工学科の新棟（電気系F棟）が平成4年9月に竣工した。それを機会に、学科の新設ならびに新棟の建設にあたりご支援、ご援助いただいた方々をお招きし、竣工披露記念式典ならびに祝賀会が、平成4年11月27日（金）開催された。

披露記念式典は、午後4時30分より、同棟1階講義室（E6－112）において、金森順次郎総長はじ工事関係者、学内の関係者など約130名の方々のご出席を頂き、情報システム工学科主任の白川功教授の司会で進められた。大路清嗣工学部長の式辞、金森総長ならびに辻三郎基礎工学部長の祝辞、上村保人施設部長の工事概要説明に引き続き、新棟の建設を担当された関係業者の代表者に感謝状が贈られた。会場のスペースの制約から、隣の講義室（E6－111）に第2会場を設け、備え付けの大型テレビに式典の模様が中継された。

披露式典終了後直ちに、福利厚生棟大ホールにおいて、寺田浩詔教授の司会で祝賀会が行われた。鈴木胖教授の挨拶、熊谷信昭前総長ならびに室田明大阪大学工業会会長の祝辞の後、桜井良文摂南大学学長の発声で乾杯が行われ、歓談に移った。和やかな雰囲気の中、情報システム工学科の創設に関する思い出や今後の期待、新棟の感想などの話題に花が咲き、瞬く間に時間が過ぎた。最後は、松田治和元工学部長、児玉慎三教授のスピーチで締めくくられ、午後6時30分過ぎ盛会裡に閉会した。

なお、情報システム工学科棟には、11月中旬より、藤岡、西尾、薦田、鈴木の各研究室が移っており、快適な環境の中、活発な教育・研究活動を行っている。3月には、情報システム工学科の第1期生39名が卒業し、その内22名が平成5年4月新設の大学院前期課程（旧修士課程）情報システム工学専攻に進学した。

（薦田憲久（電気・昭47）記）

レーザー核融合研究センター創立20周年記念式典

レーザー核融合研究センターは、昭和47年5月に電気工学教室を母体として発足して以来、平成4年5月で20周年を迎えました。発足頭初は工学部附属のレーザー工学研究施設のレーザー材料部門1部門でしたが以後順次、部門、施設、設備の整備が行われ、8部門と世界最高性能のガラスレーザー「激光XII号」を持つ慣性核融合に関する中枢研究機関となり、今日まで慣性核融合およびその関連分野に関する研究を行ってきました。この間、近畿大学等から卒業研究に来られた方々も含め学部卒業生600余名、修士卒業生300余名、博士号取得者61名が巣立っていかれました。

これまでの活動を振り返り、今後の展望を考える場として、平成4年11月24日（火）午後4時から、レーザー核融合研究センター創立20周年記念式典が千里ライフサイエンスセンターにおいて開催されました。引き続き千里阪急ホテルにおいて記念祝賀会が、産・官・学の代表者、本学関係者など400余名の出席者のもとに開催されました。記念式典および祝賀会において、金森順次郎総長、長谷川善一文部省学術国際局長初め多くの方から、御激励、御助言をいただきました。金森総長の「レーザー核融合研究センターは、一粒の種から亭々たる大樹に成長してきたが、未だ大学の庭での大樹に留まっています。…今後国家的ないしは、より広く国際的見地から検討を加え、…より大きく多方面へ枝が繁るように協力していく所存であります。…」というご祝辞は正にセンターの発展と今後の有り方を示唆するもので出席者に深い感銘を与えました。これも澪電会母体の電気系4教室、澪電会会員ならびに電磁エネルギー工学専攻、工学部の皆様の御支援の賜であります。

また式典に先立ち、記念講演会が同日午後1時から千里ライフサイエンスセンターにおいて行われ、ロシア、米国、フランス、日本における慣性核融合研究の現状と展望が各国主要機関の責任者より述べられました。

創立20周年事業の一環として、レーザー核融合研究センター20年史「飛翔」、写真集「光跡」および、プラズマ・核融合学会誌別冊特集号「激光XII号によるレーザー核融合研究の現状と展望」が出版されました。

ご多忙のところ、記念行事にご出席下さり、或はメッセージをお寄せ下さった方々に感謝いたします。

（山中龍彦（電気・昭38）記）

通信工学科で衛星による三次元ネットワークの実験開始

大阪大学工学部通信工学科（森永研究室）において、平成5年1月28日に小型地球局の落成検査が近畿電気通信管理局により実施され無事検査に合格し、小型地球局を用いた実験が開始された。この実験は、平成3年5月に設立された衛星総合通信共同研究会のもとに、参加する各大学が共同して実験を行うものであり、Kuバンド帯を用いパケットデータのような非実時間通信と音声やテレビ会議等の実時間通信を総合的に提供するISDNタイプの衛星通信の可能性、伝送品質の劣化を改善する新しい方式、新しい衛星通信のアプリケーションの可能性を検

図1　小型地球局の外観

表1　実験用地球局の主要諸元

アンテナ	形式	1.8mカセグレンパラボラ
	利得	送信：46.2dB以上 受信：45.4dB以上
送信機	周波数範囲	14～14.5GHz
	中間周波数	1.3～1.8GHz
	送信電力	+33～+46dBm
受信機	周波数範囲	12.25～12.75GHz
	中間周波数	0.5～1GHz
	受信電力範囲	-80～-132dBm（一波）
	雑音温度	250K以下（+25℃）

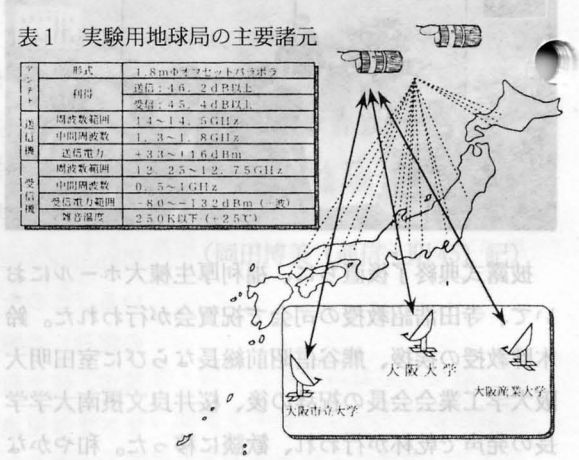


図2　実験局の構成

する研究を幅広く実施している。主要な諸元ならびに外観を表1ならびに図1に示す。

本学は、大阪市立大学、大阪産業大学と協力して、図2に示す様な構成で、衛星通信と地上回線を融合した三次元ネットワークシステムの要素となる技術に関し基礎的な実験を実施する計画である。具体的な内容としては、（1）変調多値数可変伝送方式の基礎実験、（2）衛星／地上系ハイブリッド変調方式、（3）画像信号可変圧縮方式の衛星回線における伝送に関する研究、（4）衛星を使用したパケット伝送システムにおける捕捉効果に関する研究、（5）サイトダイバーシティ効果に関する実験的データの取得　などを実施する予定である。

（森永規彦（通信・M昭40）記）

裏克己教授最終講義

「波頭と波頭の間を泳ぐ－電子ビーム研究四十年－」

電子工学科電子ビーム工学講座の裏克己教授最終講義は、平成5年2月5日（金）午後3時から5時まで、電気系のメモリアルホールにおいて執り行われ、電子工学科主任尾浦憲治郎教授による裏教授の紹介で始まった。題目は、「海で泳ぐとき、最初から波頭で泳ごうとすると非常に難しいが、波頭と波頭の間で泳ぐと楽である。その内に後ろから次の波頭がやって来る。今度はそれに楽に乗れる。研究もかくあるべし。」との意味を持ち、故抜山平一先生の文章から引用されたとのことで、先生のご研究も正にこの通りであった。

先生は、恩師の故菅田栄治教授のご指導のもと、

マイクロ波電子管の研究から始められた。電子ビーム研究施設の教授に就任されてから、電子顕微鏡に応用することを目指して超伝導線形加速器、高周波電磁界中の電子軌道理論、ピコ秒パルス電子ビームの発生などの研究を押し進められた。これらは波間の研究とも言えるが、その間、貴重なデータが多くあり、その後、ストロボ走査電子顕微鏡や電子ビームテスティングにおいて世界をリードし、波頭に乗る研究ができたとの回想であった。また、ストロボ透過電子顕微鏡、電子銃、超高圧電子顕微鏡加速系などの地道な研究を重ね、これらを基礎に、現在、超高圧電子顕微鏡の更新計画が進められているとのお話が続いた。最後に、先生の在任中には完成に至らないが、現在製作中の更新機の様子を示すスライドも写し出された。

なお、最終講義の後、研究室の同窓会が開かれ、百余名の教え子たちが集まった。その際の卒業生たちのスピーチの中に、「学生時代には研究の流れや目的が十分理解できなかったが、今日の裏先生の最終講義を聞いて初めて自分達が行った卒業研究の意義が理解できた。」との話が多く聞かれ、印象的であった。

（鷹岡昭夫（電子・昭41）記）

裏克己教授送別会

平成5年3月末日をもって停年退官される電子工学科裏克己教授の送別会が、電気系4教室主催で、平成5年3月19日（金）午後6時から8時まで、先生にとって思い出深い中央電気倶楽部3階大食堂で開かれた。送別会には、電気系教官42名が集まり、裏教授ご夫妻を囲んでディナー形式で執り行われた。ホテルでの立食パーティーとは趣を異にし、ゆったりと落ち着いた雰囲気の中で、電子工学科主任尾浦憲治郎教授の司会で始められた。電気系4教室を代表して児玉慎三教授のご挨拶があり、その中では、裏教授のご研究やご功績、ならびに、公私に渡る先生のご様子が紹介された。つづいて、村上吉繁教授

による乾杯のご発声があり、食事をしながらの歓談へと移った。

食事のあと、「スライドで綴る四十年」と題して大阪大学における裏克己教授の40年間の歩みが紹介された。東野田学舎での若き日の先生のお姿から、現在ご研究中のご様子に至るまで、研究室内外での出来事と合わせて懐かしいスナップ写真の数々が写し出された。つづいて、裏教授とご親交の深かった西原浩教授より、裏語録やエピソードを紹介する楽しいスピーチがあった。最後に、裏教授より40有余年にわたる阪大生活の思い出と感謝のお言葉があり、なごり惜しい雰囲気の中で送別会は散会しました。

（鷹岡昭夫（電子・昭41）記）

編集後記

平成4年度は情報システム工学科の第1期生が澪電会の会員として登録された年度となりました。支部も九州支部、四国支部が相次いで設立され、中国支部も設立に向け準備が進んでいます。支部活動が地域での活動なら、横のつながりである学年毎の同窓会も6件の報告がありました。

この14号では、会長ご挨拶のあとに山口元会長から「澪電会昔ばなしなど」を御寄稿いただきました。時代をおっての工学部または電気系の写真が入っており、年配の方々には懐かしく、また若手の諸君にはこのような時代もあったことを心に留めてもらえればと思います。

編集の方針としては、活字を大きくして読みやすくなった13号のスタイルを守りつつ、表紙の色だけは毎号区別できるように鶯色に変えましたがいかがでしょうか？会報「澪電」では会員の皆様からの澪電会に対する御寄稿を受け付けています。事務局に御一報をいただければ原稿用紙などを送らせていただきます。また、同窓会の報告などもお願い致します。この場合は澪電会のもっている最新のデータベースを活用していただければ幸いです。

澪電会の前副会長でもある手塚名誉教授の訃報を、先生の退官記念祝賀会のニュースと同じ号に載せるのは、編集を担当しているものとして、また長年にわたって教えを受けていたものとして大変残念なことでした。

この会報「澪電」は母校の電気系と会員とを結ぶ一番大きな橋でもあります。皆様の意見を繁栄した会報作りをしたいと思っていますので、口頭でも結構ですから、澪電会役員や電気系の教職員に意見などを言っていただければと考えております。

最後になりましたが、ご多用中にもかかわらず、‘話題’や‘卒業生の近況’などの執筆を快くお引き受けいただいた皆様方に心よりお礼を申し上げます。

（編集幹事：中野秀男、薦田憲久）

教室情報

▼平成５年度四教室主任教授

平成５年度の四教室主任（専攻幹事）は下記のとおりです。

電気　　平木　昭夫　教授
通信　　倉薗　貞夫　教授
電子　　児玉　慎三　教授
情報システム　藤岡　　弘　教授

▼電気系人事

電　気

小牧省三＝通信・助教授から電気・教授（一般電気）に昇任（平4.9.1）

堺　一男＝学内講師に昇任（平4.10.1）

佐々木孝友＝教授に昇任（平4.12.1）

三谷康範＝電気・講師に所属換（平5.3.1）

佐伯　修＝助手に採用（平5.4.1）

森　勇介＝助手に採用（平5.4.1）

岡田　実＝助手（一般電気）に採用（平5.4.1）

通　信

前田　肇＝電子・助教授から通信・教授に昇任（平5.3.1）

馬場口登＝産業科学研究所・助教授に昇任（平5.4.1）

三瓶政一＝助教授に採用（平5.4.1）

丸田章博＝助手に採用（平5.4.1）

宮本伸一＝助手に採用（平5.4.1）

電　子

高井重昌＝助手に採用（平4.6.1）

生地文也＝助教授に昇任（平4.8.1）
退職（九州共立大学教授）(平5.3.31)

裏　克己＝退官（大阪産業大学教授）(平5.3.31)

綿森道夫＝低温センタ・助手から電子・助手に配置換（平5.4.1）

情報システム

朴　炳植＝電気・助教授から情報システム・助教授に配置換（平4.4.10）

金　　寛＝電気・助手から情報システム・助手に配置換（平4.7.16）

薦田憲久＝教授に昇任（平4.8.1）

西川博昭＝講師に昇任（平4.8.1）
筑波大学助教授（電子・情報工学系）に昇任（平4.10.1）

西尾章治郎＝基礎工学部助教授から情報システム・教授に昇任（平4.8.16）

岡山聖彦＝助手に採用（平4.10.1）

中前幸治＝助教授に昇任（平4.12.1）

劉　渤江＝助手に採用（平4.12.1）

中道和則＝退職（大阪電気通信大学大学院前期課程）（平5.3.31）

山本　文＝経済学部助手から情報システム・助手に配置換（平5.4.1）

尾上孝雄＝助手に採用（平5.4.1）

▼母校の教壇に立つ本会会員

平成５年度には次の方々が非常勤講師として後進の指導にあたられます。

・電気工学科『特別講義』
関西電力㈱取締役
山崎吉秀（電気・昭33）

・電気工学科『半導体工学』
三菱電機㈱熊本製作所所長
中野隆生（電気・昭37）

・通信工学科『システム工学』ならびに電子工学科『特別講義』
㈱日立製作所　映像メディア研究所所長
渡部篤美（通信・昭38）

・通信工学科『特別講義』
富士通㈱　移動通信システム開発本部本部長
筆本一三生（通信・昭36）

・通信工学専攻『特別講義』
日本電信電話㈱　NTT技術情報センター所長
小川正樹（通信・昭39）

・電子工学科『光電デバイス工学』
日本電信電話㈱　NTT電装システム研究所
光通信研究部　主席研究員
中川清司（通信・昭43）

・電子工学科『特別講義』
シャープ㈱ＩＣ事業本部長　常務取締役
井上　弘（通信・昭35）

・電子工学専攻『集積回路工学』
㈱東芝　電子事業本部長付
（ディスプレイ・テクノロジー㈱代表取締役社長）
島　　亨（電気・昭36）
・電子工学専攻『結晶工学』
松下電産㈱中央研究所　部品材料基礎研究所
第1研究室　室長
平尾　孝（電子・昭40）
・電子工学専攻『半導体工学特論』
松下電子工業㈱
技術開発推進本部電子総合研究所所長
加納剛太（電気・昭36）
・電子工学専攻『特別講義Ⅰ』
奈良先端科学技術大学院大学教授
藤原秀雄（電子・昭44）
・電子工学専攻『特別講義Ⅰ』
日本電信電話㈱NTT 情報通信処理研究所
知識情報処理研究部部長
河岡　司（通信・昭41）
・電子工学専攻『特別講義Ⅱ』
三菱電機㈱熊本製作所　副所長
安岡晶彦（電子・昭39）
・電子工学専攻『特別講義Ⅱ』
日立製作所㈱計測器事業部　主任技師
野村節生（電子・昭40）
・情報システム工学科『システムプログラム』
㈱日立製作所ソフトウェア開発本部
関西開発センター関西設計部副部長
戸川明彦（電子・昭44）
・情報システム工学科『特別講義』
シャープ㈱取締役プリントシステム事業本部長
三坂重雄（電子・昭38）
・情報システム工学専攻『特別講義Ⅱ』
三菱電機㈱中央研究所システム基礎研究部部長
武田捷一（通信・昭40）

▼平成5年　学生見学旅行

電気工学科

3月9日　日本ガイシ㈱（本社、小牧事業所、電力技術研究所）
（財）ファインセラミックスセンタ
3月10日　セイコーエプソン㈱（本社、広丘事業所）
3月11日　㈱日立製作所（デバイス開発センタ）
引率者：平木昭夫教授、佐々木孝友教授、伊藤利道助教授
参加学生　25名

通信工学科

3月15日　㈱日立製作所（情報通信技術センタ、映像メディア研究所）
3月16日　日本電信電話㈱（横須賀研究センタ）
3月17日　富士通㈱（川崎工場）
㈱富士通研究所（川崎研究所）
松下通信工業㈱（佐江戸地区事業所）
引率者：倉薗貞夫教授、塩沢俊之助教授、中川　健助手、平　雅文助手
参加学生　26名

電子工学科

3月10日　日本電装㈱（幸田製作所）
3月11日　㈱日立製作所（オフィスシステム事業部、汎用コンピュータ事業部）
3月12日　富士通㈱（厚木研究所）
沖電気工業㈱（電子デバイス事業本部）
引率者：児玉慎三教授、李　東翊助手、高井重昌助手
参加学生　36名

情報システム工学科

3月10日　三菱電機㈱（鎌倉製作所、コンピュータ製作所、情報電子研究所）
3月11日　国際デジタル通信㈱（横浜国際通信センター）
サントリー㈱（武蔵野ビール工場）
3月12日　日本電気㈱（府中事業場、中央研究所）
引率者：藤岡　弘教授、中前幸治助教授
参加学生　37名

会員の方々のご活躍

牧本利夫名誉教授が勲二等瑞宝章を叙勲

牧本利夫大阪大学名誉教授（元教官）が平成4年度の秋の叙勲で勲二等瑞宝章を受けられました。

桜井良文名誉教授がIEEE功績賞を受賞

桜井良文大阪大学名誉教授・摂南大学学長（電気・昭23）が平成4年4月14日、米ミズリー州セントルイスで開かれたIEEEの磁気応用学会の92年度総会で、同学会から功績賞を受けられました。この賞は磁気応用分野での技術的功績と貢献に対して贈られるもので、日本人としても受賞は初めてです。

山中千代衛名誉教授が紫綬褒章を叙勲

山中千代衛大阪大学名誉教授・姫路工業大学学長（電気・昭23）は、平成4年度の秋の叙勲で紫綬褒章をお受けになりました。紫綬褒章は学術芸術上の発明・改良・創作に関して事績著名な者に与えられる褒章で、山中千代衛名誉教授はレーザーおよび核融合の研究に関して著名な業績をあげ電気工学の発展に貢献したことにより受賞されました。

滑川敏彦名誉教授と西原浩教授がIEEEフェローを受賞

この度、本会の2名の会員の方々が電気電子通信分野でもっとも権威のある学会であるIEEE（米国電気電子学会）の最高名誉称号であるフェローを1992年12月7日付で受賞されました。

滑川敏彦名誉教授・姫路獨協大学情報科学センター長（通信・昭20）は「コンシューマプロダクツにおける情報分散型ネットワーク技術に対する貢献」により、西原浩電子工学科教授は「光波電子工学、とくに集積光学および微小光学デバイス工学への寄与」により、それぞれIEEEフェローを受賞されたものです。また西原浩教授はそれ以外にレーザ学会功績賞も受賞されています。

浜川圭弘教授がWREC Congress Awardを受賞

浜川圭弘基礎工学部電気工学科教授（電気・M昭33）が、再生可能エネルギー国際会議（World Renewable Energy Congress）において、WREC Congress Awardを受賞されました。今回創設されたこの賞は、太陽エネルギーを中核とする再生可能エネルギーをめぐる学術研究ならびにその開発・利用にたずさわる人々にとって世界最高の賞です。

授章式は、1992年9月13日から18日まで英国のレディング市のレディング大学で開催された「2nd World Renewable Energy Congress」のCongress Banquetの席上で行われました。浜川教授に対する受賞理由は、長年にわたる半導体物理やアモルファス太陽電池の開発を初めとする研究業績に加え、太陽電池に対する各種国際会議における貢献が会議の組織委員長から披露され賞状が授与されたものです。

中井貞雄教授がマックスプランク財団研究業績賞を受賞

このたび、レーザー核融合研究センター長の中井貞雄教授（電気・昭36）は、ドイツ国の「1992年マックスプランク学術賞」(Max-Planck-Forschungspeise 1992）を受賞されました。

授賞式は12月8日（火）、ドイツの首都ボンの科学センター（Wissenschaftszentrums）に於て、ドイツ連邦科学技術大臣（Bundesminister für Forshung und Technologie) Dr. Heinz Reisenhuber

氏、およびアレキサンダー・フォン・フンボルト財団総裁Prof. Dr. Reimar Lust氏の出席、祝辞をもって挙行されました。

この賞はドイツを代表する研究機構および研究助成財団であるマックスプランク研究機構とフンボルト財団とが共同して選考・授与を行うもので、人文科学、社会科学から自然科学、工学等、すべての学問分野より選考され、ドイツの研究者、研究グループと共同研究、研究交流を通して顕著な業績を挙げた研究者に対して授与されるものです。

今回、中井教授が受賞された学術賞は、これまで阪大レーザー研において進められてきたレーザー核融合研究、その基礎を支えるレーザープラズマ物理に関する研究の成果、およびマックスプランク量子光学研究所とのこの分野における共同研究が挙げた業績に対して授与されたものです。学術賞には賞金15万マルクが付加されており、これは今後の日独が協力して進める研究活動に使われます。

上記以外に、編集幹事に寄せられた受賞は以下のとおりです。

○**太田快人講師（電子・昭55、電子制御機械工学科）、前田肇教授（通信・昭41、通信工学科）、児玉慎三教授（電子工学科）、山本幸一氏（電子・昭63、松下電工（株））**が「有理有界解析関数での可逆元補間問題に関する考察」により計測自動制御学会論文賞を受賞。

○**西尾章治郎教授（情報システム工学科）**がIEEE Transactions on Paralell and Distributed Systemsに掲載された「A Resilent Mutual Exclusion Algorithm for Comuter Networks」と題する論文がネットワークの信頼性向上に有効な新規性のある論文であるとの受賞理由で第7回電気通信普及財団賞（テレコムシステム技術賞）を受賞。

会員の方々のご受賞につきましては、調査が不十分で記載もれが多いかと存じます。何卒ご容赦ください。なお、受賞につきましては、随時澪電会事務局にご連絡下さるようにお願い申し上げます。

同窓会だより

電気26年卒同窓会－平成4年度会合－

鈴鹿連山の主峰で御在所岳の麓に湧く湯の山温泉峡の新湯の山観光ホテルで、平成四年の11月15日（日）、16日（月）に一泊二日の同窓会を開催した。参加者は恩師の山口、西村の両先生と同窓生9名であった。参加者が少なく残念であったが、夜の宴会ともなると先生を囲んで飲み且つ語り、楽しい一夜を過ごした。

当地は紅葉の名所であるが、特に御在所岳に至るロープウェイ（全長2159m）や標高1200mの山上から眺めた紅葉は素晴らしい景観であった。

翌日は晴天、温暖、絶好のゴルフ日和で、ゴルフ組は両先生を含む6名。ゴルフ場は温泉街に近い三重カントリークラブで、広々としたフェヤーウェイに心も伸び伸びとプレーを楽しんだ。

こうして平成4年度の同窓会も少人数であったが、楽しく終わり、来年の再開を約して解散した。

（小林俊彦（電気・昭26）記）

阪大電気二六会一同　於　湯の山温泉ホテル
平成4年11月15日
前列右より　岡本　明、宮本昌典、山口先生、西村先生、本田　茂。後列右より　永田敬太郎、栗山　宏、小林俊彦、上田　寛、下井厚雄、田中輝雄。

電気雀（電気・昭和42年卒）卒業25周年記念同窓会

昨年11月14日（土）・15日（日）の両日にかけて電気・昭和42年卒の卒業25周年記念同窓会を風光明美な有馬温泉で開催した。

我々電気42年卒の同窓会は卒業後数年間は毎年、年末に麻雀大会を兼ねて開催していたので、電気雀と呼称するようになった。（会長はクラス委員の佐々木教授）その後、5年毎に有名温泉を選んで宿泊するという同窓会を開催することになった。

今回の25周年同窓会は好天に恵まれ、晩秋の紅葉の元で、初日にはゴルフ親交コンペ（於：旭国際東条カンツリー倶楽部　世話役：島田）、テニス親善試合（世話役：土井）、懇親会（於：有明山荘　世話役：中川　スナップ写真添付）を行った。2日目には六甲山ハイキング（引率者：佐々木）とテニス大会を行い、非常に盛り沢山な行事であった。

海外出張等の理由で残念ながら数名の方が参加できなかったが、今回の同窓会には会員40名中23名の方が参加し、お互いに旧交を温め、大いに盛り上がった同窓会になった。

次回30周年には、更に多くの同窓生が参加できるように、開催時期・場所・行事内容等について検討してゆくつもりです。

（土井四郎（電気・昭42）記）

昭和43年卒／昭和39年入学・25周年 阪大電気系同窓会

日時：平成4年11月6日（金）
場所：大阪梅田・新阪急ホテル

卒業25周年を記念して、電気、通信、電子合同で50名の卒業生の参加を得て上記の同窓会を開催した。同窓会には、阪大前総長・熊谷信昭先生を始め、阪大・名誉教授の西村正太郎、尾崎弘、滑川敏彦、藤井克彦、中西義郎、塙輝雄の各先生方、母校で教鞭をとられている情報システム工学科教授・寺田浩詔、鈴木胖の両先生、大阪電通大教授・奥野喜好先生、そして現澪電会事務局・安井晴子様にご出席頂いた。熊谷先生のご挨拶に続いて、西村先生の乾杯の音頭で立食パーティに入り、先生方を囲んであちこちに話の花が咲いた。学生時代の話に加えてゴルフ談義も盛んであった（電気は当日、そして通信は翌日ゴルフコンペを開催した）。卒業25周年で40代後半に入り公私共に多忙な時期、それでも参加した卒業生はこれからの人生に夢を託してますます意気軒昂、卒業当時と全く変わらない元気さは誠に心強い限りである。1時間半の歓談も瞬く間に過ぎ、学科別に記念撮影をして散会した。卒業生一同、わざわざご出席賜った先生方に厚くお礼申し上げますと共に、先生方のますますのご健勝を心よりお祈り致しております。

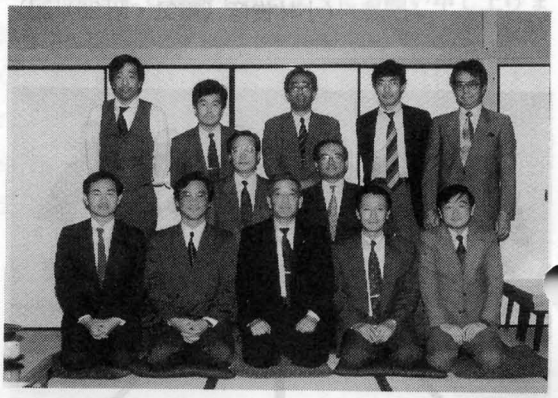
（幹事：谷内田正彦（電気）、玉川允敏（通信）、春名正光（電子））

昭和47年卒・電気工学科同窓会

卒業20周年を記念して、昭和47年卒業の電気工学科同窓会を平成4年10月30日（金）に開催致しました。

午後に見学会を催し、情報システム工学科の新校舎、情報処理教育センター、そしてレーザ核融合センターを案内して戴き、電気系の発展を実感致しました。夕刻には大阪ガーデンパレスに席を移し、懇親会を行いました。ご多忙にもかかわりませず名誉教授の藤井克彦先生にご出席を賜り、同窓生11名が集いました。懐石料理を頂きながら各自が近況報告を行いました。仕事に関する内容が中心で、みんな様々な分野で活躍していることがよく分かりました。又、藤井先生よりそれぞれの職場で部下を持つ立場になっている我々に対して業務の進め方等、興味ある言葉を頂戴しました。時間の過ぎるのを悔みつつ25周年同窓会での再開を約して懇親会を閉じましたが、二次会へ場を継ぎ、雑談に花を咲かせ、本当に楽しい一時を過しました。

（杉野　隆（電気・昭47）記）



昭和47年卒・卒業20周年同窓会

昨年6月20日（土）、21日（日）の両日にかけ、昭和47年卒業の電子工学科の同窓会を兵庫県丹波篠山のユニトピアささやまにおいて開催しました。

電子昭和47年卒では10周年を開催したあとは15周年をと思っていたのですが、諸般の事情により開催できずにおり、20周年となってしまいました。また、幹事の不手際で恩師の方がたのご出席をいただけなかったのは残念でした。しかし、参加者は21名とクラスの約半分が出席しました。

第一日目は夕方からの集合でした。久方振りに会わす顔で、はじめは戸惑いもありましたが、話を交わすうちに学生時代に戻りました。風呂で裸のふれあいをしたあと、宴会に入りそれぞれが近況報告を行いました。10周年では11名の参加があり、今回の20周年は21名の参加となったので、30周年では30名が集まるようにと誓い合いました。その後、深夜まで酒を酌み交わしながら昔や、これからを語り合いました。

第二日目はゴルフの日でした。本格派4名は早朝よりゴルフコースにでかけ、残りはユニトピアささやま内のパターゴルフでした。いずれもそれぞれが腕を競いあい、楽しい半日を過ごしました。25周年、30周年に再会することを約束し、車での参加者の車に分乗してそれぞれの家路につきました。

（〆木泰治（電子・昭47）記）

通信工学科昭和57年卒同窓会

日時：平成4年8月15日（土）

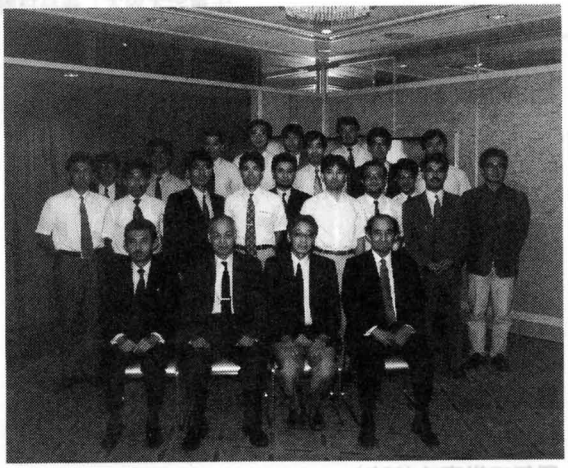
場所：新大阪ワシントンホテル

我々、昭和57年通信工学科卒業の同級生は、卒業10周年を記念して、平成4年8月15日に新大阪ワシントンホテルで同窓会を行いました。

先生方にはご多忙中にもかかわらず、滑川名誉教授、中西名誉教授、手塚名誉教授、森永教授にご出席いただきました。我々同級生も19名が参加いたしました。

同窓会は滑川先生の乾杯で始まり、しばらく歓談の後、同級生全員の近況報告を行いました。仕事の話や家族の話など大変盛り上がりました。最後に、出席いただいた先生方より貴重なお言葉を頂戴し、お開きとなりました。短い時間でしたが、久しぶりに同級生に会い、先生方のお話を聞いて、学生時代にタイムトリップしたような気持ちで楽しいひとときを過ごすことができました。

（榎原博之（通信・昭57）記）



澪電会会費納入のお願い

陽春の候、会員各位には益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。本会の活動に変わらないご支援を頂き有難く存じております。

澪電会の活動も漸く軌道に乗って参りましたが、財政状況は依然として充分とは言えない状態にあります。

申し上げるまでもなく、本会の活動は全て会員各位からの会費に依存しております。本会の活動をより活発化する為に諸般の事情をぜひご理解賜り、何卒、平成5年度会費（3,000円）の早期納入（出来れば6月末までに）にご協力賜りますようお願いする次第であります。

また会費納入の便宜を計るため平成3年度からは会費の自動振込制度も採用しておりますので是非ご利用下さい。

なお卒業年度が昭和20年以前の方の会費は免除になっておりますので納入の必要はございません。また未納の過年度会費はご請求申し上げないことになっております。

澪電会会計幹事

事務局からのお願い

澪電会事務局へのお問い合わせ事項で目立ちますのは、「終身会員であるのに会費の請求をしてきた」ということです。これは、大阪大学工業会と澪電会とを混同しておられるためと思われますので、工業会と澪電会との関係について簡単にご説明いたします。

大阪大学工学部（その前身校を含む）には、学部全体の同窓会「大阪大学工業会」と学科または系の同窓会（たとえば電気系学科であれば「澪電会」）があります。したがって、澪電会の会員のうちほとんど全ての方は同時に大阪大学工業会の会員なのです。すなわち会員構成の面では澪電会は工業会の下部組織といえます。

ところが、工業会と澪電会とは財政的には全く独立しておりまして、それぞれが独自に会費制度を設けております。したがいまして、工業会会費をすでにお払いになった方、あるいは工業会の終身会員の方からも、澪電会会費（年会費一律3,000円）を頂戴しております。また、澪電会では終身会員制は設けず、毎年会費をお納め頂いております。

会報や名簿の発行などを含め、澪電会の活動は全て会員各位からの会費に依存致しております。澪電会の健全財政確立のため、今後とも会費納入につきましてよろしくご協力の程お願い申し上げます。

なお、勤務先、住所の変更などにつきましては、工業会とは別途に、澪電会にもお知らせ下さいますよう切にお願い申し上げます。

発行　澪電会
〒565 吹田市山田丘2-1
大阪大学工学部電気系内
Tel：06-877-5111(内線4599)
Fax: 06-875-0506(澪電会宛)